國立清華圖書館
藏書之章
版權所有

特100
350

露西亞探偵譚

女の命運

著人主堂草風清

東京
萬里洞藏版

はしがき

本書は探偵政治を以て世界に有名なる露西亞に於て行はれたる探偵物語にして『運命の女』を傳へて遺憾なし、其の内容の雄大深酷、波瀾縱横眞に讀者をして手に汗を握らしめざれば已まず、露西亞の代表的探偵物語の一也。

目次

運命の女 ―― 一
廣間の對話 ―― 一
佳人滿璃子 ―― 一二
怪しき書翰 ―― 一八
滿璃子の生立 ―― 二二
無名の書 ―― 二七
伏見公爵 ―― 三三
南國の人 ―― 三八
怪しき婦人 ―― 四三
伏見の前妻 ―― 四八

波麻子の告白……五五
悪漢と貞婦……六〇
湖畔の悠遊……六四
異様なる口笛……七五
森林の活劇……八五
得能の昏迷……九〇
満璃子一念……九八
悪漢の再襲……一〇三
特別電報……一〇六
武智の出動……一一一
森林の出會……一一七
馬車の中……一二三

枝梢の白片……一二八
五里霧中……一三三
荒廢せる建物……一四〇
負傷者の許へ……一四六
和田博士夫人……一五〇
密談數刻……一五六
嫉妬の嵐……一六二
満璃子の脱走……一七三
亂れごゝろ……一七九
悪漢の行方……一八四
再會の歡喜……一八九
病床の秘密……一九五

伏見伯と小間使——二〇一
得能の素性——二〇六
怪しき訪問客——二一〇
滿璃子と波麻子——二一六
武智の許へ——二二一
波麻子の決心——二二六
密雲濃霧——二三二
綠倶樂部——二三七
和田博士邸——二四二
道化役者——二四八
偽運轉手——二五二
再度の訪問——二五七

波麻子の苦衷——二六三
滿璃子の逃走——二六八
深夜の慘劇——二七四
一小爭鬪——二七九
夜の賭博場——二八四
湖月の舞踏會——二九〇
武智伏見家に潛む——二九六
隣室の密話——三〇一
暗中劇——三〇七
武智の危難——三一〇
毒烟!!火光!!——三一四
一段落——三一九

目次終

倶樂部の夜 ―― 三二四
合圖の火 ―― 三二九
深夜の邂逅 ―― 三三三
夜半の電話 ―― 三三九
車上の密語 ―― 三四三
加藤の計策 ―― 三四三
最後の幕開く ―― 三五三
都へ都へ ―― 三六三
結婚式 ―― 三六八
淋しき樞 ―― 三七三

露西亞探偵譚

運命の女

清風草堂主人

廣間の對話

中央には圓卓子が一つあつて、それには紋綾浮織の卓子布が被つてゐる、そのめぐりには五六脚の椅子が散ばつて、少し離れて身體の埋まる樣な安樂椅子や、肱掛椅子などが順序よく配列されてゐる、部屋の片隅には一臺のピアノ、その上には美くしいリボンでくゝられた花束、それから少し離れて二三の塑像や彫像、壁間の油繪

等、總て閑雅な好みを見せた貴婦人の廣間である

その中の一脚の椅子を占た女は、これは又何とした美くしさであらう、紅玉を薄絹に包んだ樣な頰の色、露の滴りさうな錄の眸、殊にきつと結んだ口元には當世風の愛嬌を見せて、一度開けば百媚直に生ずると想はしめる、金の腕環、胸に輝くブローチ、孔雀の羽根にもまさる裳裾にも流行の好みを見せて、胸を突き出して坐つた姿は、天晴當世式の凛々しき美人である、此美人は亡き貴族の遺愛池邊滿璃子と言つて、美貌とお轉婆とを以てその名を上流社會に馳せてゐる

滿璃子はその美しい顏を傲慢さうにあげていつた

『どうも今まで來た運轉手は一人も氣に入らないんですもの』

滿璃子の傍に坐つてゐるのは彼女の母である、年老つたつゝましやかな貴婦人で、服裝の好みにも澁味なものを選んでゐる、總ての樣子が此美人の母とは受取れない程朴實で、餘處眼には乳母か何ぞの樣にも見えるが、言葉は流石に母としての威嚴を帶びて

『何です？　お前の言ふ事は本當に無茶だねえ、今迄來た人だつて皆な立派な人からの紹介狀を有つてゐたぢやないかね』

滿璃子は母の言葉を聞くや、蔑むやうな顏をして

『いゝえ、紹介狀なんか何の役にも立ちませんよ、第一あんな顏をした運轉手ぢや恐れ入るわ、阿母も御存知ぢやありませんか、自働車を運轉する事なら妾にも出來ますわ、だけど傍に醜い顏の男が坐つてちや誰れだつて嫌やですわ』

年老つた母は呆れ顏をして、溜息を吐きながら

『全く此の頃の若い女には驚いて了ふ、輕薄ともお轉婆とも申しやうがない、禮儀禮讓といふ樣な事は聞くのもいやで氣隨氣儘の事ばかりしたがる、これ、お前は是迄度々言つたぢやないか、馬丁とか馭者とかいふものに何とやらする者を莫迦々々しいとそれだのに今

お前が運轉手の好男子を選ぶといふ事は、他人に爪はじきさるゝ基ですよ』

『何て言つたつて好ぢやありませんか』

と滿璃子は冷笑して『まさか妾は運轉手に惚れやしませんよ、他人の言ふ事なんかどうだつてかまやしないわ、妾の事を傲慢だ傲慢だつて言ふけれど、本當に妾は傲慢だから運轉手なんかにはねえ……

……教育だつて、地位だつて、自分より以下の者に惚れる程、馬鹿ぢやありませんよ、ねえ阿母さん、だから此點だけは決して妾を疑つちや不可せんよ、ね』

と話してゐる時、僕が戸をあけて入つて來て、恭しく滿璃子に向ひ
『また一人參りました』と通じた
『さう、ぢや玆へ連れてお出で』
と滿璃子が言つたので、僕は旨を了して直にひつ込んだが、間もな
く僕に伴はれて、一人の男が這入つて來た

新運轉手

見るところ背がスラリと高くつて、年も若く、はつきりした輪廓
の紳士にして見たい樣な美くしい容貌である、それに身のこなし態

度、風采、殊にお辭義をする時などに、いふに言はれない威儀があ
る
滿璃子は平生馬を見る事が巧みだ、食後の散歩とか、日曜の遠乘
とかによく駿馬を扱ひつけてゐる、それが爲に馬の性質や特徵など
を鑑別する力が勝れてゐるので今も此男が入つてくると丁度自分の
好きな駿馬に對する樣な態度で、頭から足の先まで凝視した、若い
美くしい令孃に斯ういふ態度をとられると、大低の者はまごついて
了ふものだ、然るに此若者は平然として少しもわるびれる處なくそ
れに應じ靜に令孃の言葉を待てゐた、暫くすると滿璃子は鳥の囀る

様な聲をして

『貴方は妾の自働車の運轉手になつてくれますか、是迄に何處かで務めた事があつて？』

男は叮嚀に會釋して

『否え、まだ何處へも奉職した事は御座いません、丁度四五日前自働車學校を卒業したばかりで御座います』

と答へて、手にした一葉の證書を令嬢の手に渡した、それは學校よりの推擧狀とも言ふべきもので、此男の履歴を語つてゐる、開いて見ると先づ得能好之助といふ名が記してある、それから次の様な證

明があつた

得能好之助

右之者電氣及ビ石油發動自働車學校ヲ優等ニテ卒業シタル事ヲ證ス性質沈着ニシテ運轉法巧妙ナルヲ以テ大都會ニ於テ其職ヲ得ルニ最モ適セリ

滿璃子は之を讀み終つて莞爾笑ひ、更に若者に向つて

『ぢやお願ひして見ませう、屹度貴方は妾の處にゐて滿足して下さいますよ、仕事といつても別に面倒の事は無いんです、妾が自働車で出かけたいと思ふ時、何時でも出かけられる樣に用意してさへあ

ればいゝのです、早い時は朝の六時頃からの事もありますがね、大低もつと遲いのですからね、それから一日三四時間以上の事はないから、殘りの時間は貴方の勝手にしていゝんです』と言つて立上つたが、『貴方の名前は？』

と更に問ふた

『得能好之助と申します』

『えゝ分りました、ぢや是から妾の自働車を見て下さい、それからね、貴方の部屋は庭の牆根に近い處にありますから』

『は、かしこまりました』

と得能は叮嚀に挨拶して、また僕と共に部屋を出て行つた

その後姿を見送つて、老母は不興氣に頭をふつた、それを見て又お轉婆の滿璃子は笑ひこけた

『おほゝゝ、阿母さん、妾はもう阿母が何を言はうと思つてるか知つてますよ、阿母さんは妾がひとりで決斷て了つて、綺麗な男を雇入れたのが氣に入らないでせう、おほゝゝ、然し安心なさいよこりや妾の癖なんですもの、決して御心配かける樣な事はありませんから、ね、十分に保證してよ』

いふかと思ふと快活に立上つて、次の瞬間にはもう戸の外へ出て

了つた

佳人滿璃子

老母は益々不快な顏をして呟いた

『本當に仕樣の無い子だよ、それに叔父の遺產が多いので、却てあの子の爲に不幸だ、何不自由が無いもんだから、仕たい放題の事ばかりして、本當にお轉婆つてありやしない、何か將來に惡い事でも起つてくれなけりやよいが』

老母の心配は全く根據の無い事ではないのだ、此廣い大都會に於

ても、滿璃子より美くしい女は尠い、更に滿璃子より富める女はない、誰でも一度見れば終生その顏を忘られない、金髮はゆるく波を打て眼は人を惱殺するに足る、その肉付のいゝ體格は、快活の遊戲を好む爲に益々發達してゐる、その贅を盡した雄々しい姿には、何人も打込まない者はあるまい、晴れし日の郊外、又は公園などに、折々彼女の駿馬に跨れる姿を認める者は皆眼を欹てる

滿璃子は常に活潑の遊戲を好んだ、他の令孃達が詩歌音樂に親しんでる時も、彼女は一人郊外に遠乘をした、舞踏に狂ふ交際社會に出る事を避けて、獨り自然の風物に親しんだ、それが爲にいろいろ

な風評が行はれる

『どうも不思議ですねえ』

と誰かゞ言へば

『全くですね、屹度何ですよ、あの令嬢が交際社會に出るのを厭がるのは、こりや秘密にすべき失戀か何かあつたんですよ、さうでなくつてあの美くしさで引つ込んでるつて事があるものですか、全くどうもあの方が出てくれれば、交際社會は大した騷ぎでせうね』

なゞ噂の種となつた

果して失戀でもあつたのだらうか、之を知つてる者は廣きペテロ

グラードの都に於て只一人のみである、然し此一人は默して一言もいはない、何となれば此一人の男には既に妻があるので、永劫に秘密は秘密として胸一つに葬り去らんとしたのである、だから何人もそれを知る事が出來ない

然し秘密は兎に角として、その美貌が鳴り響いてゐた爲に、運轉手を募集した時も申込者は非常に多かつた、その多くの競爭者に打勝つて、容貌の綺麗な爲に雇はれた得能は、自分の部屋に返つてからも愉快で堪らな相に足拍手をとつて綺麗な聲で快活な歌を歌つたその歌は倶樂部などでよく紳士などの間に歌はれる端歌である

『私は屹度此賭事に勝つて見せる、之に勝つといふ事は生涯の中で最も面白い事だ、それに第一仕事それ自身が愉快だ、加之にかういふ美人と數時間同じ自働車に座れるつてんだから、全く以て冥加至極の次第だ』

かう獨語して彼は部屋の中を歩き廻つた、然し誰も此賭事といふ意味の分るものはあるまい、こゝに此稿を草してゐる記者にもまだ分らないのだ、それに第一不思議なのは、彼の周圍の樣子である、例へばその胴衣を見るに、到底運轉手などの着るべき品物では無いそれにその手を見るに、まるで大理石の彫刻の樣に美くしい、之ば

かりでも荒仕事などをする者とは思はれない

彼はなほも部屋の中を歩きながら、その新らしい器具などを見て滿足の笑をもらしてゐる、殊に庭には別の入口のあるのを見て、大に滿足の微笑を唇邊にたゞよはせて

『よし〳〵、これが有りや好都合だ、成功成功！』

と何やら分らぬ事を呟いた

それから急に身を起して、忙がしさうに僕を呼んだ

『一寸君、僕アね町まで手荷物を取りに行つてくるからね、お嬢さんが訊ねられたれさう言つてくれたまへ！』

と氣輕く言つて、部屋を出て行つた

怪しき書翰

一時間許り經つて得能は町から歸つて來た、手には堅牢な大鞄をつるしてゐる、そして自分の部屋に入るや、鞄をあけていろ〳〵の品物を取出した、靴、夜具、着物、手廻りの小道具等である、それを一々叮嚀に部屋に備へ附けてある箪笥や箱などへしまひ込んだ

成程その着物などは、貧乏な運轉手などにふさはしい樣なものである、併し不思議にも夜具は絹布で出來てゐる、その上靴も普通の

人の穿く樣な安物ではない、更によく見れば、襟飾だとか、カフス釦だとかその外こま〳〵した物に非常に金のかゝつたものがある、ナイフ、ペン、鉛筆、書簡用紙、封筒などまで取そろへてちやんと箱の中に入れた、それから最後に革張の小箱を取出して、之を箪笥の底に隱したが一見してそれは拳銃である事が知れた

得能は之等の物を漸くしまひ了つて、箪笥や箱に鍵をかけた

『よし、これでまづ一つの仕事が出來たのだ、是から一つ友人に手紙を書いて置かう』

と獨語つた、そして今しまつたばかりの紙を取出して、之にさら〳〵

とペンを走らせた、その文句は次の通りである

親友武智林次郎君足下、兼テノ予ガ計畫ハ成功セリ、予ハ今正ニ新ラシキ務メ場所ニアリテ、欣々トシテ其ノ職ニ努力セン事ヲ誓ヘリ、令嬢ハ非常ニ美人ナリ、實ニ非常ナル美人ナリ、サレド羨ム事ナカレ、予ハ先ヅ予の職務ニ忠實ナルベシ、況ヤ令嬢ノ心、果シテソノ容貌ノ如ク美クシキヤ否ヤ、呵々、ソハ後日ニ至リテ分明ナルベシ、予ハ今眼ヲ八方ニクバリ、耳ヲ兎ノ如クソバダテ、

一事一物ト雖モ見落サヾランコトヲ、聞落サヾランコトヲ努ム若シモ此賭事ニシテ成功センカ、予ガ君ト共ニ受クル處ノモノハ甚ダ尠少ナラザルベシ、乞フ共ニ努力セン哉、今後ノ手紙ハ兼テ規定セル符號ヲ用ヒラレン事ヲ、更ニ小僧ヲ使用シテ音信スル事ヲ忘ルヽ勿レ

得能好之助

何の事とも知れない手紙を書き終るや直に封筒に入れてその上に現時ペテログラードに名聲隱れなき大探偵武智刑事課長の宛名を書

いた、それから得能は自分でそれをもつて、近所の郵便箱へ行つて投函した

彼れ果して何者ぞ！、而してまた何事をか企てつゝある？

満璃子の生立

警視廳の一室に於て、武智課長はその朝届いた十數通の手紙を調べて、片つ端から處理してゐたが、その中の一通を披いて讀むと、小首を傾けて稍々考へ込んだ、それは得能好之助よりの手紙である

丁度そこへ助手の加藤が入つて來たので、武智は直ぐそれに話しかけた

『おい加藤、これから又大分困難の仕事が出來るらしいぜ』

『はゝア、そりや面白いですな』

と加藤はもう來るべき事件を想像して愉快さうに微笑んだ

『君には一度話した事があつたね』と武智も微笑んで、『僕はどうも滿璃子の生命財産に就て前から懸念してるんだが、君はさう思はんか』

『あ、その事ですか』と加藤は點頭いて

『全く仰有る通りです、貴方へ前に報告した通り、最も信ずべき筋

から、嬢の生命財産が非常な危險に瀕してるといふ事をきゝました』

『然うだ、その事を今一度詳しくきゝたいんだ』

『いや、私もさう詳しく知つてるつてわけぢや有りませんがな、たゞ話が非常に面白かつたので、それでまだ覺えてる樣な次第です』

『吃、それでいゝからまあ話してくれたまへ』と言つて、武智は悠然とクッションの厚い椅子に背を持たせた

『第一に滿璃子嬢は、今の池邊未亡人の實の娘ぢやない捨子だつたさうですな』と加藤は語り出した

『で、その證據があつて未亡人も實子でないといふ事を知つたが、

しかも滿璃子を可愛がつて、その繼兒であるといふ事を忘れんと努めてるのですな、世間によくある奴で、未亡人の本當の子は生れると數時間で死で了ふ、夫はそれを情婦の子とひきかへて何喰はん顏をしてる、とこれですな、池邊卿の情婦といふのは、西班牙生れの輕薄な舞姫だつたさうです、未亡人はそれをよく知つてゐるが、滿璃子を可愛がるのは眞情ださうです』

『然うだ、全くその通りだ』

『池邊卿は若い時は頗る放蕩な男だつたさうです』と、加藤の語り續けた處は次の樣である

何處の國でも上流社會は亂れてゐる、金があつて、暇があつて、美衣美食をしてゐるからどうしても遊惰放蕩に流れる、池邊卿もその例にはもれなかつた、西班牙生れの舞姫に關係したのもその頃の事である、で、滿璃子がその女の子であるといふ事は、卿が臨終に際して自白した處が、然し夫人は深く夫を愛してゐたので、夫の總ての非行を許してやつた、それ故に義子である滿璃子は、そのまゝに正當の相續人になつてゐるのである、亡き池邊卿の遺産は非常に多額である、がその外に叔父の殘した遺産が八百餘萬圓ある、それが爲に滿璃子は勝手の事をする事が出來るので、芳紀は今年二十二

結婚の申込者は降る樣に多いが、彼女は悉くそれを拒絶して了ふ、その理由は一人の妻ある男を愛してゐるからである、前に一人の男が滿璃子の秘密を握つてゐると言つたのはその男で、文學博士和田義太郎といひ大學の教授であると共に有名なる美術家である

無名の書

『和田博士の妻君といふのもなか〳〵美人ださうですな』と加藤は言葉をついだ

『まるで人形の樣な顏をしてる相です、博士は滿璃子を愛してゐな

から、どうして今の妻君を迎へたかといふと、矢張一時の迷とか間違とかからでせう』

『ふむ、君はなか〳〵詳しい、それから先は……？』

『處がペトログラードに一年程滯在してる一人の西班牙人がありまして、自ら伏見公爵と名乘つてる處を見ると、家柄はなか〳〵いゝ筈ですな、然し此男が甚だ危險な人物だといふ話です』

『何故さうだらうか、それには十分な證據でもあるだらうね』

『先生、そりや貴方の方が御存知ぢやありませんか、貴方が秘密にお調べなすつた處によれば、彼は負債の山を持つてるし、又非常に

財産があると見せかけてるが、マドリッドに伏見公爵なんて男はない相ぢやありませんか』

『全く然うだ』と武智は確信ある口調で答へた

『それから貴方は滿璃子に、公爵の危險人物であることを御注意なすつたのですね』

『いや汁意はしない、たゞ孃の危險を助け樣とその計畫をたてたのだ、滿璃子はまだ此事に就ては少しも知らない、一體此事を僕が知つたのは、ある無名の手紙を受取つた時からだ、僕はいつも無名の手紙は燒いて了ふが、そればかりは曾て見た事のある手跡だから保

存して置いた』といつて、衣嚢から一通の手紙を取出した、それには次の様な事が書いてある

刑事課長武智君足下、君ハ君ノ敏捷ト才能ニ關シテコレヲ示スベキ事件アレバ、ヨシソレガ自己ニ利益ナルト否トニカヽハラズ、常ニ非常ナル興味ヲ有ストキク、故ニ予ハ今足下ニ左ノ事實ヲ告グ、若シ美人池邊滿璃子嬢ガ保護者ナクシテ旅行シ、又ハ郊外ニ自働車ヲ駈ルガ如キ事アレバ或ヒハ恐ルベキ攻撃ニアヒテソノ生命ノ失ハルヽナキヲ保セズ彼女ハ日夜惡人ノ監視ヲ免レズ、危險身邊ニ迫リテ薄氷ヲ踏ムガ如シ、君ノ親友ヨリ

加藤は之を見て點頭きながら

『はゝあ、成程、――然しこれ丈の事では伏見公爵の敵が書いたと云ふ事は判然分りませんな、どうして探知しました』

『こりや何でもない事さ、僕は一度字を見れば、それを書いた人の性質は大抵わかる、此手紙は女が書いたのだよ、僕は餘程前に此れを書いた婦人の手紙を見た事がある、手紙といふのは本野卿のポッ

ケットから落ちたのだがね、何の氣もなしにそれを見ると、親友の親といふ字がこれとそつくりぢやないか、だから僕は此無名狀を見ると、すぐその時の手紙を思ひ出したんだ』

『はゝあ、で、その執筆者は誰ですか』

『こりやね、渡邊龍子といふ女が書いたのだ、決して間違やしない何となれば龍子といふ女はね、數ケ月間伏見の情婦になつてた事があるのだ』

かく話してる時、加藤は不意に

『しッ』と目くばせをして、『今公爵の聲が聞えました！』

『勿論だ』と武智は落つき拂つて、『僕が來いといつたのだ、しかし君がゐちや具合が惡いから、一寸隣室へ行つてゝくれたまへ、但し立ち聞きをしてゐてもいゝよ』

加藤はその言葉に從つて素早く次の部屋に去つた

伏見公爵

加藤が次の部屋に姿を消すと、殆ど同時に僕が現れて、公爵伏見義政の出頭を報じた

『然うか、直ぐ通せ』

と武智は命令した

間もなく其處へ現はれたのは、中肉中脊の立派な男である、瞳と髭の眞黑な處を見ると、直ぐ南方の產だといふ事がわかる、服裝、態度等もなか〳〵氣どつてゐて、外見だけは如何にも堂々たる風采であるたゞその眼は何となく下卑てゐてきよろ〳〵と見廻す時、人をして惡感を催ほさせる、缺點をいへばそれが缺點であるが、公爵はなほその威儀を失はないで、つか〳〵と武智の側に歩み寄つた、そして這麼ところへ呼ばれるのは名譽に關するといふ樣な態度で

『君』と武智を呼びかけた、『君は非常に重大の要件があるから直ぐ

出て來いと我輩にいつたがね、我輩は交際場裡にあつて多忙の身なんだ、何故君自身が我輩の處へやつて來ないんだ』

『いや、僕はもつと多忙なんだ』といつて武智は冷然と彼を見つめたその顏を公爵はいま〳〵し相に見たが、たゞ唇を震はして默つてゐる、武智は更に冷然として

『公爵！　貴方は三月許り綠會の會員になつてましたな、僕もあの會の會員だから、實は貴方の身元を調べて見たのです、處が公爵、會で受取つた報告は甚だ惡いですよ……い〳〵ですか、殘念ながら貴方はマドリッドに於ける僕等の調査を取消す事は出來ますまい』

言下に公爵の顔はさつと蒼く變つた、そして何か口の中で呟いてゐたが、獨言の樣に

『不思議だ、斯ういふ事を刑事からきくのは實に不思議だ』

と喇る樣な態度を示した

『公爵、貴方は僕のいふ事を怒るか知れないが、今いつた通り僕も亦あの會員なんです、して見ると自然會員の身元は知らなければならない、處が僕の受けた報告は今いつた樣な次第です』

公爵は漸く自己の態度に復して

『武智君、君は何の恩怨が我輩にあるのか知らないが、我輩が會に

出入するといふ事は餘程君のお氣に觸るんですね、君は會で調査の報告を受けたといふが、その主動力は君だらう、そして何か我輩に犯罪行爲でもあつと邪推したな、人を莫迦にしてる、會の方に出した紹介狀にもある樣に、確に我輩の家系は有名な伏見家なんだ、伏見家といへば古い格式のある家柄だ、然るに何故ぞ、刑事が我輩の家を調査するなんて、餘りに無禮ぢやないか』

『いや其麼事は僕は知らない、たゞ貴方も知つてる通り、わが緣會では外國人の入會する毎に、必ず分擔があつてその身元を調べるんだ、然しこんな事はまアよしませう、つまらない、但しこれだけは

御知らせして置きませう』と武智は皮肉の顔をして、『巴里では伏見公爵といふ名の惡人を探してゐますよ』

南國の人

此言葉をきいたなら、公爵は定めし厭な顔をするだらうと、武智はその顔をじつと見てゐた、然るに公爵は却て反對に、喜ばしさうな顔をして微笑した、そして落付きはらつて

『我輩と同名の奴を探すといはれちや、我輩も甚だ氣持がよくない然し我輩は何も關係があるわけぢやなし、決して痛痒は感じないの

だ、事によつたら惡者が我輩の名を騙るのかも知れない、第一我輩はまだ巴里へ行つた事がないのだ』

武智は一寸考へる樣な顔をして

『あゝ然うですか』といつたが更に聲をかへてとう〳〵貴樣は陷穽に陷ちた、何故そんな分り易い事をいふのか、巴里へ行かないなどゝいつても、こちらにはチャンと證據があるのだ、こりや偶然の發見だが、貴樣の荷物の鞄には巴里ホテルの張紙がある

かういつて、既に彼を窮極の處まで追ひつめやうとしたが、更に武智は一轉してかういつた

『しかし公爵、もう餘計の事をいふのは止めませう、よし前にはどうであつても、もう貴方は惡事をしないと僕は信ずる、で、最後に一言しますがね、玆に一人の高貴な婦人があつて、その方が非常に貴方に對して興味をもつてますよ』

話が女の事になると、伏見はもう今の事などは忘れて了つて頻に眼を輝かし乍ら

『勿論我輩は惡事などをしやう筈はない……』といつて今度は親しさうに、『君も御存知の樣に、わが西班牙人は婦人を辱かしむるよりも寧ろ死を選びます』と暗にその婦人の名をきゝ出さうとする

『貴方はもう感づいたでせう、そら、評判の高いなにを……、まあお聽きなさいM公爵夫人かね――名はまア云はない事にしやうが――非常に貴方に興味を持つて居ますよ、さうして貴方の事だといふと、どんな一寸した事でも非常に心配してゐますよ』

これを聽いて、伏見は武智の術數に陷られるとも知らず、忽ち得意になつて了つた、一體南方の人は多血質の者が多い、從つて輕薄で褒めらるゝ事ばかり好きで、一寸御機嫌をとられるとすぐ夢中になつて了ふ、伏見もそれで、武智の言葉をきくと、ぐつとそり身になつてM、Mといふ公爵……ハゝア分つた、前田公爵夫人だな、

と直感じた、M公爵には近頃競馬で昵懇になつたのだ、そこで伏見は微笑み乍ら『武智君、たゞ一言云つてくれ給へ、ね、女の名は綾子でせう』

『然うです、綾子です』と武智は調子を合はせて、『貴方は知つてるでせうが、夫人は昨日留田へ行きましたよ、貴方が偶然の様な顔をして留田へ行けば、貴方はキット競爭者をだし抜く事が出來る、本野卿は綾子夫人を敬愛してますよ』

『然うだ、我輩も知つてる』公爵は忽ち躍り上つて『左様なら』といつたが、また一寸立留つて

『いや有難う、君が忠告してくれた事は何より有難い、たゞ君は我輩の敵のいつた事を直に信じたから誤解もしたのだ、まア可い、我輩が留田から歸る頃は誰ももう不審にしない様になるだらう』と應揚にいつて、やがて一揖して歸て行つた、武智は後姿を見送りながら思はず微笑した

怪しき婦人

倉皇として立去つた伏見の足音が聞えなくなると、武智は腹を抱へて絶倒した

『はゝゝゝ、彼奴とう〳〵係蹄にかゝりやがつた、はゝゝゝ』

其處へ隣室に隱れて居た加藤も出て來て

『彼奴立派に尻尾を現はしましたな、然しあの口ぶりを見ると、まだこつちを瞞してゐるつもりらいしがどうでせう』

『然うさ、其處が却つて愛嬌さ、はゝは……、惡人なんてものは餘程偉い奴でもその位のもんだ』

と武智は頤を撫して部屋の中をあちこちと往き來した

『全くですな、今迄の經驗でもさうだが此方が油斷した顏さへ見れば、彼等は一角の惡黨になつたつもりだから可笑しい』

『はゝゝゝゝ、全く然うだ』

と武智は何時になく興に乘じて、頻に笑ひこけた

油斷と見せて油斷せず、可笑しさうに談笑してゐる間にも、常に神算鬼策を廻らしてゐるのは武智の特色である、尙困難といふ困難の問題に打つかる毎に、表面は平生にも增して事なきを裝ふのが武智の常である、然し今日の笑ひはそれでも無いらしい、どうも妙だと思ひながらも、加藤も共に笑ひこけた

然し運命の神は、久しく二人を笑はしては置かなかつた、忽ちけたゝましい音をさせて、其處へ一人の婦人が入つて來た物に驚かさ

れたといふ様な、求むる物を見失つたといふ様な、言ふに言はれない表情をして、四邊をきよろ〳〵と見廻す、まるで二人などには氣のつかぬ様な顔をして、何か口の中でぶつ〳〵と言つてゐる、しかしよく聞いて見ると、彼女はきれ〴〵にこんな事を云つてゐる

『彼の人は玆に居た筈だ、私はよく知つてゐる、隱したつて……逃げたつて……私は何處までも追つて行く』

而してなほその邊を索むるものあるが如く怪訝な顔をして見廻す

武智は靜かに婦人に近づいて、注意してその様子を見ると、別に惡人毒婦らしい處もない、そこで軟らかに

『奥様、貴女は誰をお尋ねですか』

と訊ねた、婦人は初めて氣がついた様に武智を見たが、彼女の衣服は見るかげもない古いものであつた、しかもふさ〳〵とした黑髮はもつれ亂れて、その圓い肩の上に垂れかゝつてゐる、顔は何處か氣品があつて、いふにいはれない美しさを持つてゐるが、少し蒼褪めた處へ三筋四筋と黑髮がかゝつて、一層惱ましさうに見える

武智の問に偶と顔をあげた婦人は

『あの、義政が玆に來てゐた筈ですが、貴方御存知ありませんか』

といふなり武智の足下に倒れ伏して

『助けて下さい、どうぞ助けて下さい、神様に祈ります、どうぞ助けて……』

と氣も轉倒した樣に大呼した、武智は驚ろいて先づ援け起こした、

そして靜かに椅子に坐らせて、親切にいたはりながら

『貴女、氣を確かりお持ちなさい、私は喜んで貴女をお援けしませう、しかし一體何事が起つたのです、貴女が助けて助けてといふには深い理由でもあるのでせう、それを悉皆お話しなさい』

伏見の前妻

女は漸く我に歸つて、おろ〳〵聲を出してかういつた

『私の名譽に關する事なんです、いゝえ私はもう……私を、彼奴が私を見捨てれば、私は死にます、可愛いゝ子供まで殺して自殺します』

彼女の瞳孔は空虛の樣にあいて、力なくきよろ〳〵とその邊を見廻す、胸は外から見ても知れる程動悸がうつて、唇は心の騷狂に震へてゐる

武智は一層落着いて

『まゝ、心をお鎭めなさい、そして簡單に事の大體を云つて御覽なさ

い、然しまあ何でせう、私の見る所によると、貴女は伏見に瞞されたとか何とかいふわけぢやありませんか』

『然うです、さうです』と女は非常に驚いた様な顔をして、彼の人は私と子供とを見捨てました、私は彼の妻なんで御座います、私は昨晩西班牙から來たばかりで、いゝえ探しにで御座います、そして漸く探しあてたので御座いますが、とうとう又見えなくなつて……私はもう落着いてお話しなんぞしては居られません、此間に遠く逃げられてしまへば、又と再び見つける事が出來ませんから……』

とそは〳〵として立去らうとする、武智は靜にそれを止めて

『いゝや御心配には及びませんよ、彼が何處へ行つたか私の方でちやんと知つてますからな、決して御心配なく……まアゝ落着いて何事もお話しなさい――、さうすると貴女は西班牙人ですか』

女は稍々落着いて、靜かにその唇を開いた

『否、私は波蘭人で御座います、名は波麻と申しますが、伏見と知り合になつたのは三年許り前で御座います、尤もその時は私はほんの生娘でしたから、女をたらすに上手な彼の手にひつ懸つたので御座います、さういふ樣なわけですつかり彼の惡計に陷つてしまひ、兩親の言葉にも從はず、わざ〳〵西班牙くんだりまで一諸に逃げた

ので御座います、そこで牧師も立會の上結婚したのですが、その時の證書が茲に御座います』

といつて、波麻子は胸の襞の間から一通の書付を取出した

『はあ然うですか』といつて武智はそれを受取つて見たが、『然し貴女の此の證明書は役に立たぬかも知れませんよ、西班牙の制度によれば矢張他の各國と同じく、結婚といふ樣な事は西班牙の行政官の許可を得てゐなくては不可ませんからな……、一體伏見といふ人はその時公爵でしたか』

『え、』と波麻子は喫驚して自分の耳を疑ふ樣に言葉も出ない

『貴女が結婚した時ですな、その時伏見はもう公爵でしたか』

『いゝえ』と波麻子は强く頭を振つて

『そんな事は御座いませんよ、彼はたゞ伏見義政といふばかりで、理髮師をやつて居つたので御座います』

『理髮師？　然うでしたか』

と武智も稍々意外であつたが、さもこそと心に點頭いた、美くしき波麻子は更につゞけて

『結婚致しましてから、私はすつかり彼を信じました、そして半歲位は至極幸福に暮しました、彼も亦その當座は私を愛してくれまし

て、何彼と世話をしてくれました、然しこれは本當の親切心からでないのはいふまでもありません、問も無く子供が生れますと、彼の態度はすつかり變つて了ひました、私を見くびるのはいふまでもなく、生活には困る、手は足りない、もう愛も幸福も羽根が生えてどん〳〵飛んで行つて了ひました』

斯く語り來りて波麻子はほつと一息吐いた、束の間の甘かつた夢の跡を追想しやうにも、現實の苦き傷みはその影を被ふて了ふのであらう、武智も加藤も默して耳を傾けた

波麻子の告白

波麻子はなほも言葉をついで語り出した

『丁度今より一年前で御座います、その時はもう昔の愛も戀も醒め果て〻了つたので、伏見は故郷を見捨て、私達を見捨て〻佛蘭西へ參りました、そして巴里でよい務め口を見つけて、やがては自前の理髪所を開くと、斯う申しまして、僅かのお金を遺して旅立ちして了ひました、然しそれは口實で、元より私などはそれぎり捨て〻了ふつもりだつたのに相違御座いません』

『あゝ然うですか』と武智も同情の眼を瞬いて『それから貴方はどうしました』

『伏見の遺して行つたお金といふのは眞の僅で御座いましたから、それでは二三週間を支へる事しか出來ませんでした、で、私は困難に困難を重ね、漸くパン代位は自分で働きましたが、今迄の事もあり、又私の性質として、兩親に詫て援を乞ふといふ事は出來ませんでした、その中にもう伏見からは一向手紙は參りませんし、私の眼も初めて開けて、だん〳〵探つて見ると、彼はもう佛蘭西には居ないといふ事で御座います、それからといふものは私も落膽して、日

頃の强情心も拔け果てゝ了ひ、僅か殘つた品物を賣り拂つて、その お金を以て波蘭の兩親の處へ參りました、兩親は私の爲に嘆き、悲しみ、怒りましたがそれでもとう〳〵私に同情して呉れて、子供も快く育てゝ呉れる事になりました、そこで私も安心して、此上はどうしても伏見を探し出さうと思ひ立ち、樣々の艱難をして茲に參つたので御座います、で、漸く彼を見つけたので御座います、一體私は何處へ行けば伏見が居るかといふ事をよく知つて居りました、あれは奇麗な輕薄な女のゐる處へさへ行けば居ります、私もさういふ處で見つけたので御座います』

波麻子が倦まず長物語を終ると、武智もほつとして

『でも幸に見つけて良かつたですなあ』

といつたが、更に言葉をついで、『然し不思議ですな、何故彼は以前と同じ伏見を名乘つてるのでせう、貴女から隱れるには變名を用ひた方がいゝぢやありませんか』

『いゝえ、彼は私がこんな遠くまで附けてくるとは思はなかつたので御座いませう、キット私が餓と寒さに迫られて死ぬと思つたに相違ありません、前にもそんな事が御座いましたから』といつたが、急に感情が亢ぶつて堪へ得ぬやうに聲をふるはしつて『だのに私は

十分節操を守つて、いろ〳〵の困難にも堪へて、昨日までは彼を探したので御座います、昨日漸く探しあてゝ、雨の降るのに下等芝居の入口で待つてゐると、どうで御座いませう、彼は汚らはしい女と手を組んで出て來るぢや御座いませんか、それを見た時の私は、もう……名譽も何もすつかり地に落ちたと思ひました……』

波麻子はかくいつて咽び入つて、最後の言葉は涙に消されてよく分らない、武智もいたく同情して眼をしばたゝきつゝ、無言に女を見つめた

惡漢と貞婦

波麻子は身體を震はしつゝ、更に涙聲をつゞけていつた

『私はそつと彼の後をつけて參りました、すると二人は或る美くしい家に入りました、私はそこの門番に尋ねますと、あれは伏見公だといふので御座います』

『ふむ、それからどうしました』

と武智は我にもなく訊ねた

『私はもう僕のさへぎるのもかまはず、狂人の樣になつてその部屋

に飛び込みました、すると伏見は女の白い腰に抱かれながら、お前は何だ、私の妻だ、戯談をいふな、狂人だよ、狂人だよ、とその女にいつてきかせて、無理矢理に私を追ひ拂つて了ひました、その時の私の口惜しさは……まアどんなで御座いましたらう……』

波麻子は身を震はせて泣き伏して了つた

武智は思はず激怒して

『惡漢！』と怒鳴つた

波麻子は漸く身を起して

『今日は是非伏見をつかまへて、裁判所に名譽恢復の要求をしやう

と私は考へたので御座います、處が昨日の事があつたものですから彼は又姿を隱して了ひました、私はどうしやうかと思ひましたが、いろ〳〵辛苦して漸く發見し、玆まで跡をつけて參つたので御座います、どうかあのお援け下さいまし、どうして、どんな方法で私は此れを果したらよう御座いませうか』

武智は椅子から立上つて、懇ろに波麻子を慰めながらいつた

『まア御安心なさい、キツト私が力になつてあげます、それから失禮ですが貴女は、長く此都に滯在する費用をお持ちですか』

『はい、當分の處は大丈夫で御座いますが、若し必要になれば故郷

から取寄せても宜しう御座います、貴女が留まれと仰有れば、いつまでゞも停まつて居りませう、然し夫がさういふ何で御座いますれば……』と俄に危惧の念を抱いて懷中から契約證書を出さうとする

『いや、もうそれはよろしい』と武智は押しとゞめて『然しよく考へると、貴女は全く瞞されてゐるんですな、結婚の證書といふも、或は全く嘘なのかも知れませんよ』

『まア』と波麻子は不意に絶叫して『若し瞞されたとすれば、もう私の力には及びませんから、私はたゞ自殺するばかりで御座います』

かういつた言葉の底には、深い絶望と決心とを包んでゐた

『死んでどうなるもんですか』と武智は諭すやうにいつた『貴女が今死んで了へば子供はどうします、父に別れてまた母を失つて了ふ世に之ほど不幸の子はありますまい、早まつては不可ません、うまく行けば必ず果させてあげます、又その爲には十分に彼に刑罰を加へ得る弱點も握へてありますからな』

波麻子は溜息をついて何分にもと賴んだ、武智は快く承諾して加藤と共に靜に女を送り出した

湖畔の悠遊

得能の美貌は令嬢をして忽ちに郊外の悠遊を思ひ立たせた、數日の後、得能は愈〳〵令嬢滿璃子と共に輕快なる自働車を郊外に馳らせた

それは美くしく晴れ渡つた日であつた

郊外につゞいて居る大通りには、幾臺の自働車が、うら〳〵かな陽光をあびて往來して居た、そして孰れも負けじ劣らじと全速力を出して後のものは前のものを追ひ越さうと競爭して居る、滿璃子等の自働車もその中を縫つて進んだ、然し得能は心に思ふ事があるのでしつかりと把つたハンドルの手を容易には動かさなかつた

『得能さん、もつと速く馳つて下さいよ、どんな事があつても關ないから、前の車を追ひ越して頂戴』

と滿璃子はもうたまらなくなつた如な調子で、斯う叫んだ、そして神經の亢奮した眸を据ゑて前方の車をぢつと見つめ、もどかしさうに身體を震はせた、然し得能は矢張り前方を向いた儘で、頭を輕くふりながら

『これが今全速力です、これ以上の速力は實際危險です』と靜に答へた

『え？妾が要求したらどうします』

と滿璃子はまるでしぼり出したやうな聲で、命令的につゞいて叫んだ、それでも得能の手は動かなかつた

『いゝえ、いくら仰有ても機械力以上には參りません——呀、御覽なさい』

突如！　得能は躍り揚つて叫んだ、瞬間！　今まで疾風の如く馳つて居た前方の自働車は俄然非常なる砂塵と音響とを揚げて毬のやうに地上に投げ出された、正しく轉覆したのである

見るより得能は直ちに運轉を止めて、素早く車を飛び下りた、轉覆した車はもう再び役に立たない位、めちゃ〳〵に破壞されてしま

つたけれど幸乘手には大怪我をした者もなく、反つて皆夢のやうな顔してきよと〳〵と四邊を見廻して居る、兎に角助ける程でもないので、得能は直に自分の車に歸つて來た

令嬢滿璃子は口もきけない位、呆然して車臺の上に立つて居た

『御覽なさい滿璃子さん、貴女の仰有るやうに狂人的に馳らせればもう屹度あんな災が起るに極つて居ます』

と得能は滿璃子の注意を惹くやうに靜にいつて

『あれでは一萬圓もした物が、もう役にたゝないぢやありませんか、貴女はこの上にも追ひ越すやうな必要がお有りですか』

と低い力のある聲でいつた、令嬢滿璃子は眼を据ゑてこの若い運轉手を見つめたが、顔を赤くして默つて居た、此專制的なる令嬢には若者の態度が氣に入らなかつたのだ、然しそのいふ事が正當であつた爲め何ともいふ事は出來なかつた、得能はまたハンドルを把つた自働車は運轉を始めた、郊外の空氣は清らかで、曠漠たる青草の原、處々に白楊の木立があつて、それが微風に白く裏葉をかへして、晝の陽光に輝いて見える、滿璃子等の自働車はその間を馳せた

それより滿璃子は一言も發しない、得能は何か心で思ふ事があるらしく折々疑のあるやうな眼つきをして滿璃子をふり返つて見た

が、これも遂に一言も話さうとはしなかつた

二人の目的地といふのは市街から數哩隔つた處、林の中の美くしい湖の岸であつた、滿璃子はその林の中の青草の上で晝飯を喫しやうといふのだ、然し滿璃子の終局の目的は、何處であるか得能は知らない、それは滿璃子の胸中にあるのだ、少時して湖岸に達した、

得能は車をとある木蔭にとめた

湖といつてもさまで大きいものではない、然し此邊に珍らしい景色のよい處で、夏の間は貴婦人紳士等の格好の遊び場所になつて居る

滿璃子は得能に命じて青草の美くしく敷つめた林の中に晝飯の用意をさせた、そして自分は湖の岸に下りて四邊の景色を眺めた

正午の日光は恰も洪水のやうに林に降り注いでさつと湖水の中に流れ込む、湖上には白帆が靜に動いて居る、向ふ岸のなだらかな丘の上には豆のやうな遠乘らしい騎馬の人の動いて居るのも見える、林の中は靜まり返つて、折々小鳥の囀るのが靜けさを破つて居る許りである

得能は用意を終つて、滿璃子を呼んだ、その時どこからともなく異樣の口笛の聲が聞えた、幽かながらも極めて鋭い響が靜かな森の

空氣を透して聞えると、得能は異しんで機敏に四邊を見廻したけれ共近い處には人影も見えなかつた、滿璃子は無心に草の上に坐つて四邊の景色に見惚れてゐた

數分間の後、滿璃子は口を開いて

『得能さん、お前さんはまだ妾の處に來たばかりだから知らないのは尤もだけれども妾は雇人に抗議をされるのは大嫌ひよ、お前さんはまだ妾を知らないからと思つて先刻は默つて居たのです、それはさうと妾はお前さんを普通の人ぢやないと思ふわ』とごく落付いた調子でいつて得能の顔を見た、得能は微笑して

『お許し下さい、滿璃子さん、私は實際自分の身分を忙れて居りました、けれども滿璃子さん、私には貴嬢の生命を賭する事は出來ません』と謝罪するやうな調子でいつた

『え？妾の生命が何ですつて？　そんなものは妾自身尊いと思つては居ませんよ』と滿璃子は投げ出したやうにいつた

『滿璃子さん、けれども貴嬢は年もお若く美くしくもある、猶その上に財產もある、將來貴嬢をまつてゐるのは幸福ばかりです、それだのに生命を何とも思はないといふのは不思議ではありませんか、生命は私のやうな者でさへも尊いと思ひますから——まア兎に角お

車にお乘りなさつては如何ですか』

得能はかういつてまた四邊を見廻した、滿璃子は此の若き運轉手の意見ありさうな言葉を不審にも思つたけれど、またその話を大なる興味を持つて聽いた、それに彼れの聲には一種微妙な響がある

『これは屹度平凡の男ではない』滿璃子は心にこんな事を考へ乍ら勸めらるゝまゝ默つて車の方へ近寄つた、そして今度は自身も得能と一緒に運轉手臺に乘つて、自分でハンドルを把つた

自働車はやかて湖と反對の林の奥に向つて漸次速力を增して來た滿璃子は自身で運轉するのがさも愉快であるかのやうに、振り返つ

て得能に何か話しかけやうとしたが、その瞬間、彼の女は得能の側にピストルの置いてあるのを見付けた

異樣なる口笛

得能の側にピストルの置いてあるのを見つけた滿璃子は、刺擊されたやうに顏を揚げて

『お前はなんでピストルを持つて居るのです』となじるやうに訊いた

『私は蟲のせいか何となく今危險が起りさうに思はれてならないの

です、此ピストルは貴嬢を防ぐために必要だと思つたからです』と
得能は靜に答へた
『何ですつて？得能さん、お前さんはまだ妾を三日しか知らないぢ
やありませんか……』といふのを得能は急に中途で制し、愛嬌を見
せて
『ま、お待ち下さい、貴嬢は先刻林の中で口笛の音をお聞きになり
ませんか』
となだめるやうにいつた
『え！』と滿璃子の顔は見る間に蒼くなつた、そしてハンドルを堅

く握りしめて
『お前さんは妾を驚かすのね、え、實際妾も口笛はきいたわ、けれ
ど口笛になんか、さう注意するものはありやしません、そしてまた
誰がお前さんに妾の保護者となる權利を與へました』
といつて怒つた顔を得能の方に向けた、然しその時滿璃子は、此若
き運轉手の美くしき眼に一種異樣の光のあるのを見た
『滿璃子さん』と得能は熱心と誠實とを面に表はして
『眞實をお話しすれば私が貴嬢の僕となつたのに二箇の原因があり
ます、第一は私が以前に或る料理店で立聞した事です、つまり貴嬢

を何處かで攻擊して貴女の黃金及び高貴なる寶玉類を奪ひとらうといふ惡漢等の相談です、第二は私は屢々公園で貴孃が馬上にあるのを見かけました、打ちあけて申せば、貴孃は私が今迄見た中で一番美くしいお方です、それで私は惡漢が毎日貴女をつけ覗つて居るといふ事をきゝまして、出來る限り貴女を保護しやうと決心したのです』

得能はかういつて滿璃子の顏をぢつと見つめた、令孃滿璃子は此若き男の不意の話に、驚いたやうに顏を赧らめて默つてしまつた、それと共に自分にも分らぬ不安の念が犇々と身に迫つて來るやうに

感じられて思はず身を慄はせた

林は益々深くなつて來る、白楊、樅などの大木が無限に連續して居るかと思はれる、曠漠なる林間の路、轍の音にその靜けさを破つて、滿璃子と得能とを乘せた自働車は全速力を以て突き進んで行く

滿璃子は矢張りハンドルを握つて居た

得能は少時してまた話をつゞけたが、話はだん〳〵込み入つて來た、そして愛と云ふやうな語も屢彼の口に繰り返された、然しそれは極めて理論的なもので得能はいつまでも主人たる滿璃子に對する口調を以て話した、滿璃子はそのうち一言も發しなかつた、そして

また話の進むのを止むる事も出來ず、さりとて聽き度くもないといふやうな態度できいて居たが、やがてごく冷淡な口調で

『得能さん、お前さんの話は妾によく解らないのよ、お前樣はどうして妾が馬に乘つてるのを見ましたか、お前さんはどかの紳士の馬丁でゞもあつたのですか』

といつて紫水晶の樣な瞳をあげて鳥渡若い運轉手の方を見た、得能は笑ひ乍ら

『私ですか、いゝえ私は度々馬に乘つたのです、然し貴孃は私に氣がつかれなかつたのでせう、貴孃は馬の乘り方にばかり注意なさつて外を見る暇はお有りなさらなかつた樣でした、そしうて貴孃は普通の騎手になど御注意なさらなかつたのです』

といつて若い運轉手は胸ををどらせた、何となれば彼れは若しや滿璃子が過去の記憶を甦らせて、自分を思ひ出しはしないかと思つたからである

その瞬間、得能は再び異樣なる口笛の音をきいた

再び異樣なる口笛を耳にした運轉手得能は、忽ち用心深い心に立かへつて居た、そして極めて眞面目な嚴かな口調で

『滿璃子さん、お聽きなさい、また口笛がきこえます、危險です、

道が狹くなりましたから、注意して靜に進まないと危險です』

然し前に若き運轉手の意味ありさうな言葉に心臟をそゝられて、心の均衡を失ふ迄に胸を躍らせて居た滿璃子には此得能の警戒が耳に入る餘裕を持て居なかつた、路はだん〳〵狹くなつて來た、處々に木の株や石ころ等が邪魔をして居る、林は愈深くなつて、鬱蒼たる大樹は枝をまじへ、日の光は茂みに遮られて、林の中の空氣は重く沈んで陰慘の氣が充滿して居るやうに覺えられる

運轉手得能は油斷なく四邊を見まはした、そして彼の心には滿璃子を中心として非常なる危險が、刻一刻にせまつて來るやうに感じ

られて思はずピストルを取り上げて、引金に手をかけた

『滿璃子さん、危險です、路が狹くなりました』

瞬間！口笛は三度きこえた

得能はもう一寸の猶豫もなく四邊に眼をくばつて居る、彼れは正しく危險の近よりつゝあるを覺えた

然し滿璃子は、何者も聞えぬ如く、ハンドルを握つたまゝ、大理石のやうに身動きすらしない、自働車は全速力をもつて木の根株を飛び越え、石ころを跳ぬ飛ばして突き進んだ

俄然！　疾風の如く馳つてゐた自働車は、バリ〳〵〳〵といふ音

響と一緒に運轉を中止した

車輪が木の株にひつかゝつたのだ

『呀ッ』と二人が叫ぶ間もなく車は半分程横向になつたまゝ留まつた

その瞬間、得能は牡牛の呻るやうな聲をきいた、その聲に應じて自働車の止つた、路傍の大木の陰から躍り出した三人の大男、各々黑布を以て面部を包んで居る

『ヤイ、待てッ』と眞先に進んだ大男はかう呶鳴るや突然、滿璃子に向つて飛びかゝつた、滿璃子はあまりの事に、氣も顚倒する許り

驚きの聲を揚げて、得能に抱きついた、然し得能は最初より期する處があつたので自若としたまゝ、ピストルを上げるより早く、眞先に躍りかゝつた大男を目懸て轟然と打ちはなした

森林の活劇

倏ち慘劇の幕は開かれた、得能が擊ちはなつたピストルは、狙ひたがはず眞先に進んで來た大男の肩先に命中した

『呀！』と叫ぶ間もなく、惡漢は大木の如く虛空をつかんで大地に倒れた、陰慘たる大森林の中は、今や凄愴たる殺氣に充滿した

之れを見た他の二人の惡漢は、狼の如く眼をむき出して激怒したんで躍りかゝつた、そして突然、得能にしがみ附いて居る滿璃子の肩先をつかんで、力を込めて自働車より引ずり落さうとした、然し得能が渾身の力を以て打ち拂つた拳に、惡漢の手は滿璃子の肩から離れた

『こん畜生！』と中でも圖拔けて猛惡なる大男は、呻吟くやうに叫

『やい此死にぞこねえ奴！』

と大男は憎々しく叫んだが、今度は持つて居た大ステッキを振り揚げるや、骨も碎けよと得能の眞向目がけて打ち下した、夫れと見た

滿璃子は

『あれッ！』

と思はず驚愕の聲を揚げた、然し得能もさるもの、車上ながらに身體をひらりとかはしたので、ステッキは頭上をはづれて、右の肩先にはつしとあたつた、それが爲に得能は思はずピストルを取り落した、命にも換へられない第一の武器を失つては、彼はもうどうする事も出來ない、しかし若き運轉手は手を束ねて、おめおめと惡漢のなすまゝに從ふ男ではない、再び彼等が滿璃子を眼がけて飛びかゝらうとした瞬間には、得能は滿璃子の手を離して、矢庭に自働車よ

り飛び下りた、そして別人のやうな聲で

『滿璃子さん、早く車を動かしなさい』

といふと同時に、彼れは左の手で自働車の運轉を妨げて居つた木の株から手早く車の輪をはづした、自働車はゴドリと舊のやうになつた

『さ、早く先にお進みなさい、全速力で……私は充分奴等と鬪ひます』

然し滿璃子はそれをきかず

『いゝえ、私一人ぢや行きません』

と覺悟あるものゝ如くにいひ放つた、その顏は土色をして居る、けれども、此勝氣なる令嬢は自分の保護者であり、忠僕である得能を見捨てゝ遁げやうとはしなかつた

その間に、今迄手を束ねて見て居た第三の惡漢は、突然車の上に躍り上つた、そして輕蔑したやうな調子で

『一人で厭なら俺樣が御一緒だつゝゝ』

と毒々しく笑つた

『呀ッ』と滿璃子は飛びあがつて叫んだが、然しその瞬間自働車は運轉を始めた、餘りの事に流石の得能も吃驚して叫んだが、その時

先の大男は再び得能に迫つて來た

『こん畜生、愚圖々々せずに往生しろ』

といひ様、再び打ち下したステッキに得能は避けやうとする隙もなくしたゝか頭を打たれて了つた

『ざまあ見やがれ』

得能は遂に惡漢の爲めに打倒されてしまつた

得能の昏迷

惡漢は倒れた得能を小氣味よげにじろりと眺めて

『やい青二歳！見ろ貴様も馬鹿の一人だ、馬鹿な女のいらざる肩などを持ちやがつて天罰ァこんなものだ、へッざまァ見やがれ馬鹿野郎！』

毒づいたが、扨急いで踵を返して自働車の後を追はんとした、自働車は既に遠く馳り去つて、たゞ滿璃子の叫ぶ聲が、折々林の彼方から微かに聞えて來る、四邊の空氣は恰も古沼の如く靜まり返つて蕭殺たる腥風が人の肌に迫つて來る如く感じられる

惡漢は立去らうとして、鳥度振り返つたが、その時地上に倒れて居る運轉手のチョッキに光つて居る者のあるのを見つけて、彼れの

足は地に吸ひ付けられたやうに止まつたが、また急いで引返して、倒れた運轉手の上にまたがり、ポッケットから光る物を引出して見た、それは光彩燦爛たる大きな金時計である

『ホーあつた〳〵』とそれを取り上げ乍ら『宜し！、此れア只の運轉手ぢやねえぞ、やい熊公、死眞似は止めて此男のポッケットを探さねえか、女の方は坊太郎一人で大丈夫だ』

と最初得能に擊たれて倒れた惡漢を呼んだ、すると今まで死んだやうに倒れて居た件の惡漢は、むつくり起き上つたが、傷の處を痛さうにおさへて

『うまくやりアがるな』

といひ乍ら側へ寄つて來た

『なに？愚圖々々いはねえで探せつて事よ』

と先の大男は金時計をポッケットにねぢ込み乍らいつた、そして犯も他の物を取るつもりで、屈んで運轉手のポッケットを探し始めた

得能は實に此機會を待つて居たのである、彼れは惡漢に打たれて倒れたけれども、全然正氣を失つたのではない、氣絶した如くに見せて私に時機の到るのを待つて居たのだ

突如！　電光の如くに飛び起きた彼れは油斷して居る惡漢を、ど

うと計りに地上に投げつけ、同時に膝でその胸を踏みつけた、そしてポッケットに隱し持つて居た小刀を出して直ちに惡漢の胸を刺した、鮮血はさつと四邊に飛び散つた、之れを見た第一の惡者は驚愕の聲を發したが、傷いた肩をおさへ乍ら、一目散に林の奥を目懸けて逃げ込んだ

得能はほつゝ息をついて四邊を見廻した、併し耳を澄ましてみても、今は自働車の音も、滿璃子の聲も全くきこえなくなつた、密林の中には何處からともなく、闇黑なるものが犇々と迫つて來る如く林の中には風の嘯も絶えた

得能は暫らく四邊を見廻して居たが、やがて惡漢の傷を檢めて見た

『此傷では死ぬ氣遣はない、牢屋に入れる爲めにや生かして置く必要がある、然し今は何事も出來ない、先づ第一に自働車の後を追ふより外はない』

得能は斯ういつて急いで駈け出さうとしが、然し乍らそれは不可能であつた、先刻、大男の爲めに打たれた頭部の傷が非常に痛んで來てそれが爲に彼れは恐ろしく眩暈を感じた、果てはとう〳〵堪へられなくなつて其處へ倒れて了つた

『私は、怎うしても滿璃子を加護けなければならない』

斯う叫んだが、やがて彼は昏々として自己を辨ぜざるに至つた

滿璃子の一念

北露西亞の大森林は愈深くなる、路は益狹くなつて來た、日光は全く密林にさへぎられて了つたらしい、然し今はそんな事を問ふべき處ではない、滿璃子と惡漢を乘せた自働車は先へ〳〵と進んで行く、路が狹くなるにつれて益木の根や石ころは多くなる、自働車は折々その爲めに空中に躍り上る、その度毎に滿璃子の身體は跳ね揚

られる、然し滿璃子に取つてはそんな處の事ではなかつた、惡漢の手から何かして自働車を取り戻さねばならぬ、そして幾度かそれを試みた、然し纖弱なる滿璃子の力は到底惡漢に及ぶ筈はない

『畜生！何しやがるんでえ』

惡漢は輕蔑したやうに、せゝら笑つて肘を揚げて滿璃子を突き飛ばした

『やい女郎、い、加減で觀念しやアがれ、ぢたばたする丈得はねえ』

恐ろしい形相をして呶鳴つた、然し滿璃子は尙勇氣を失はない、如何にもして自働車を取り戻し、後に引返して若き運轉手を助けや

うと決心した

然し到底せんすべはなかつた、惡漢は折々滿璃子の方を眺めてせゝら笑つて居る、林は深く、路は愈惡くなつて來た、滿璃子は渾身の智慧を絞つて機會を見出さんとした、けれども心がいらだてば、いらだつ程、爲すべき事は分らなくなつて來た、然し彼の女は遂に之を見出した、そして急いて自分の帽子の留針を拔取つた、路が狹く險しくなるにつれて、流石の惡漢も車の方に氣を取られて居る

その瞬間！　滿璃子の顏は更に一段の凄味を加へた、そしてひそかに惡漢の樣子を見廻して居たが、突然、渾身の力を留針に込めて

惡漢の後腦目懸けて突立てた、此不意打ちに流石の惡漢も一とたまりもなく苦悶の聲を揚げて倒れてしまつた、滿璃子は遂に自働車を取り返し得たのである、然し乍ら此爲めに彼の女は更に驚愕の度を增した、彼の女の顏は死人の如く土色に變じ、眼は見ひらいたまゝ瞳をさへ動かさうとはしなかつた、滿璃子は實際眼の前に死人を見た事は今まで無いのである

然し今は躊躇すべき時ではない、次の瞬間に於て滿璃子は何物をも忘れた人のやうに直にハンドルに取りすがつた、そして迅速に方向を轉じて、もと來た路に向ふや、疾風の如くに走り出した

路は狹く木の根は多い、滿璃子の身體は車上で毬の如く弄ばれる
然し平常の心を失つて居る彼の女は、夫んな事には更に頓着しない
唯前方を見つめた儘、宛然彫像の樣に凝つて動かない
俄然！　自働車は非常なる動搖と共に止まつた、夫れは地上に倒
れたる惡漢と若き運轉手とに衝突したからである、滿璃子は愕然と
して飛びあがつた、一個の死人の爲めに非常なる愕きと恐れに囚は
れた彼の女は、更に此處に二個の屍體を見て、慄然髮の毛まで逆立
つのを覺えた
彼の女は呆然として車の上に突つ立つた、事實滿璃子は施すべき

術を知らなかつたのだ、然し乍ら次の瞬間に於ては別樣の事實が彼
の女を刺戟した、見よ！　彼の女の若き運轉手得能は、倒れてあり
乍らも、猶時々苦しさうな息を漏して居るでは無いか、滿璃子は敏
捷く車を飛下りた
『得能さん！　得能さん！　確乎なさいよ、得能さん』
滿璃子は得能を抱き起さうとして、耳元でその名を呼んだ、然し
得能は息こそあるが返事はしない
『得能さん！　よ、得能さん！』
再び呼んだけれども、同じく返事はない、滿璃子は失望して得能

の顔をぢつと見つめて居たが、思ひついたやうに立あがつて、今度は全身の力を以て得能の身體を自働車の上に運び揚げやうとした、そして彼の女は一刻も早く此危險なる地を去らうと思つたのである然しそれは駄目であつた、得能を抱きあげるには滿璃子の力は餘りに弱かつたのだ

惡漢の再襲

滿璃子は呆然と其處に立ち盡した、時は餘程經つた、林の中は全く靜である、日の光は全く消えて、仰げば木の葉越しに代赭色の雲

も見えるが、四邊は寂然として鳥一羽啼かない、曠漠たる大森林の中、樹の間樹の間にはもう夕闇がひそ〳〵と迫つて來た

『私、どうしたらいゝかしら』

滿璃子は斯ういつたが、再び得能を車に乘せやうと試みた、然し夫れは怎うしても不可能であつた

『怎うしたらいゝだらう、若し今得能さんを助ける事が出來なけりや惡漢が息を吹き返して屹度得能さんを殺すに違ひない、怎うしたらいゝだらう、隣村までは遠いし……』

といつて滿璃子は殆ど當惑してしまつた、彼の女は惡漢共の蘇生を

非常に恐れたのだ

『然し怎うしても助けなければならない』

と斯ういつて、滿璃子は堅く決心したものゝ如く、つと立あがつて四邊を見廻した、然し何の影も見えない

『得能さん！　よ、得能さん！』

出來る丈耳に口を寄せて呼び甦さうとした、然し何事も終に無効であつた、

暗黑は刻々にせまつて來る、今や滿璃子は自分の危險なるを忘れて唯忠實なる運轉手を助けんとして居るのだ、斯くして滿璃子は三

度、得能を自働車の上に運び揚げやうと試みた、そして先づ得能を抱き起さうとした刹那！、何者か突然後より抱きついた、滿璃子は驚いて振り拂はうとした時、酒臭い息をはつと吐いて

『アハヽヽヽとう〳〵貴樣をつらまへたぞ、おい俺の世界一の寶物もうかうなつちや駄目だ、ハヽヽヽさア俺と一緒に來い』

と勝ち誇つたやうに呶鳴つたが、突然、大風呂敷を滿璃子の頭へ引かけ、それを確然と包んでしまつた、滿璃子はもう聲を立てる事すら出來なくなつた、力ある腕は輕々と滿璃子を空中に捧げて、その儘林中奥深く運び去つた

特別電報

時利あらざれば、正義と雖も影をひそめて了ふ、佳人滿璃子は得能の忠實なる保護ありしにも關はらず、また自ら男優りの性質なるにも關はらず、惡漢の爲にとう〳〵林中へ運び去られて了つた、運命の奇遂に窮まるところを知らぬ

郊外の森林中に此大慘劇が行はれてから數時間後の事である、ペテログラードの警視廳では、武智課長宛の特別電報を受取つた、助手の加藤はそれを持つて、早速武智の室を訪づれた

『先生、電報が參りました』

武智は何か調べ物をしてゐたが、悠然とその身體を捩ぢむけて

『あゝ然うか、開いて見て呉れたまへ、多分倶樂部からだらうと思ふが』

加藤は命ぜらるゝまゝに、その封を切つて讀み下した

『否、然うぢやありません、和田博士からです』

と意外らしい顏色をしていふ

『あゝ然うか』と武智は前と同じ樣な調子で、何の用事か一寸讀んで呉れ給へ』

『至急來イ、八幡村ニテ君ヲ待ッ、和田と有ります』加藤は明瞭と電文を讀みあげて、先生の顔色を見た

『や、恁うしたつて？』と武智は吃驚した樣な顔をして、『何か起つたんだな、おい加藤、詳しい事は後で話すが、兎に角僕と一緒に行く用意をして呉れ』

『は、八幡村へですな、銃器を持つて行きませうか』

『勿論だ、しつかり用意して行かなきやいかん、事によると非常な危險と鬪はなきやならんかも知れんよ』といつたが、忽ちまた水の如き冷靜に返つて、君も知つてる通り、和田博士はあれで非常に滿

璃子を愛してるね』

『然うでせう、否、そればかりでなく、令嬢は博士以上に博士を愛してるさうですな、少くも世上の風評はさうですよ』

『なアに世間の噂などはあてになりはせんがね』と武智は微笑んで

『噂つてものは皆な想像から出る事なんだからね、我々の職業にあつてはそれを信じちやいかん、然し和田の結婚は少くも不幸のものであつたのさ、先生失望の極あんな向ふ見ずの結婚をして了つたのだ、一體和田は非常に滿璃子を愛してゐたが、滿璃子は少しも先生を愛さないと思つて了つたんだね、まア失戀といふわけさ、それで

現今の妻君と結婚したんだが、あの傳子といふのは恐ろしい嫉妬深い女なんだ、殊に和田が滿璃子を愛してゐたといふ事を知つてからは、滿璃子を憎む事は蛇蝎よりもひどいといふ話だ、これは和田が僕に話した事だから間違がないさ』

武智は斯う語り來つた時、加藤は突然言葉を入れた

『で、今日の出來事はどうしたもんでせう』

『それは斯うなのだ、今日滿璃子と和田は、どういふ譯かで密會を約したのだ、密會といつても愛の戀のといふわけではなく、何か金錢上の計算とかいふ話だ、事の起りは此頃の展覽會にあるので、和

田の出品した繪が非常に令嬢の氣に入つたのだね、元來その繪は非賣品だつたが、滿璃子は是非それを買ひたいといふわけさ、そこで博士に手紙をやつて、自働車で群馬村に行き、そこで賣買の相談をしたいといつたので、和田はそれを直に承諾したのだ』

武智の出動

加藤は瞬きもしないで武智のいふ處をきいてゐたが

『何故博士はそれを承諾したんでせう』

と言葉を容れた

『何故かといふに、博士は手紙や何かで應答すれば、忽ち妻君に感付かれて、又間諜とか何とか煩いから、それで人のゐない處へ行つて會はふと約束したんだらう、然しあまり人の行かない處へ行くといふのは、滿璃子にとつては極めて危險の事だから、もしも危險の事があつたら救つてくれと僕に頼んでおいたのだ、然るにかういふ電報の來た處を見ると、屹度何かあつたに相違ない、尤も新運轉手が十分の保護者にはなつたらう、が……こんな電報が來たのだから或は彼の手におへなかつたのかも知れない』

武智は斯く語り來つたが、急に電報の消印を見て

『えゝと甲野驛發電だから群馬村に近いとして、特別としてある處を見ると急用に相違ない、僕等は早速出かけて行つて彼等を救つてやらう』

『承知しました、では早速用意致しませう』

と加藤は身輕に立上つた、武智もついと身を起したが

『和田は僕等を八幡で待つてるんだからね、八幡つてそら甲野驛の近くの八幡森さ、だから汽車で甲野まで行かう、何時に出るかな』

といつて衣嚢を探した、武智の衣嚢には何時でも汽車の時間表や、その他の探偵に必要な物が忍ばせてあるのだ、で、武智は今や時間

表を取出して見たが

『五時五分に出るな、よし、未だ充分時間はある』といつて、今度は加藤に向ひ

『おい一寸電話できいてくれたまへ、若しも得能が倶樂部へ行つてるかつてね、多分そんな事はあるまいが、念の爲にきいて置く必要がある』

加藤は命令を了承して出て行つた、その後で武智は腕をこまねいて事の成行を考へて見た

『電報を打つからには危險があつたに相違ない、危險があつたとすれば得能はどうしたらう、そしてその危險を和田が知つたのは屹度數時間後の事に相違ない、もし果してさうだとすれば、滿璃子等の遭難は數時間前の事であらう、得能はどうしたらう、滿璃子はどうしたらう群馬村といへば大分人里を離れた處だから、どんな事が起つたとも分らない、早く行つて援けてやらねばならぬ』

と思ひ出すと妙に心が悸つてくる、然し忽ち元の心に復つていろいろその時の計畫などを考へてゐると、二三分經つて加藤が返つて來た

『どうだつたね、居なかつたらう』

と武智は先づ訊ねた

『は、今日は得能は倶樂部へ行かんさうです』

『ふむ、然うだらう、して見ると愈々彼は令嬢と一緒だな……』

『然うでせう、今私序だから滿璃子の家へも電話をかけて在否をきいて見たんです』

『處が矢張居なかつたらう』と武智は引取つていつた

『然うです、不幸にも……』

と加藤は沈んだ聲で答へた

『好し、では直ぐ出かける事にしやう、幸ひ今は日が長いから、早く行つて彼等を援けてやらう』

といふかと思ふと、後に掛けてある帽子を取つて輕く頂き、そのまゝつか〳〵と外へ歩み出した

森林の出會

二人は玄關口に待たしてある馬車に飛び乘つた

『停車場へ急いで呉れ』

と武智が命ずると、馬首は直ぐその方角に向けられて、音もなく轍は軋り初めた、間もなく馬車は停車場に着くと、汽車は今將に出や

うといふ處で、汽罐車は頻に黑煙を吐いてゐる、乘客は左往右往に馳せ違つて、我先にと客車に入らうとする、世の愁ひ、旅の樣々は早くも玆に見らるゝのだ

武智等はその間を縫つて、忽ち二等室の一隅へ乘り込んだ

やがて汽車は動き初めた、一瞬一轉汽車は都會の外郭を廻つて、煙突の間に樹木が加はり、樹木がだん〳〵多くなつた頃は、汽車は既に都を遠く離れて郊外に進んで行つた

武智は默々として坐つてゐる、加藤も默々として坐つてゐる、武智は只管和田博士の身の上を氣遣つた、單に和田が碩學としてばか

りではなく、また得難き美術界の一天才としてばかりでなく、個人としても親しい友人であるから、一層その身の上を氣遣つた

然し間もなく汽車は甲野驛に着いた、停車場より八幡森までは極く近いので、二人は又默々としてその方角へ道を急いだ

と、遙か彼方の林の端に丈高き一人の男の立つてるのが見えた、武智は早くもそれを見つけて、的確和田に相違ないと見てとつた、彼方もそれを覺つたと見えて、忽ち此方へ近寄つて來た、やがてその姿がはつきり見え出すと、和田義太郎は驅け出して來て

『やあ武智君、來てくれたね』と嬉しさうに叫びながら、『や、實に

待ち遠しかつたよ』

と息をせい〳〵吐きながらいふ

『然うだらう、僕もこれで電報を見ると直ぐ出て來たんだ』

『さうか、どうも有難う、併しね、僕は一秒毎に妻の間諜に見つかりはすまいかと心配したよ、僕の周圍には一歩毎に間諜がゐるんだから耐らないさ、早く行かう、林の中に入る迄は安心して息もつけやしない』

その周章てゝる樣子を見て、武智は眉をひそめながら

『何だ馬鹿々々しい、君は男ぢや無いか女から、しかも妻君から隱

れやうとするのは餘程をかしい』

といつて、凝乎と和田の顏を視つめた

和田は不平らしい顏をして

『馬鹿々々しいつて？　まあ可い、こんな事でぐづ〳〵してる暇は無いんだ、兎に角林の中へ行かう』といひながら、又せか〳〵と歩き出した

やがて三人は林の中に達した、博士はほつと息を吐いて、矢張歩きながら斯ういつた

『君は妻を恐れるのが可笑しいといふが、僕はたゞの臆病者でない

つて事は君も知つてるだらうぢやないか、僕は普通の世間の男のやうに所謂妻君の尻の下に敷かれてる者ぢやないよ、……が、まあそれはどうでもよい、一體何故僕が君を茲へ呼んだか知つてるかね』

和田の様子は何となく落付かなくつて、いふ事までが可笑しい程そは〳〵して見える

『知つてるさ』と武智は落ち付いて『無論滿璃子の事ぢやないか、一體どんな事が起つたんだ？』

『まあ行かう』と和田は問には答へもしないで『直ぐ此先に僕の馬車が待つてるんだ、然し馬車に乘つて事件の場所まで行つて見ると

事によるとあれはもう殺されてゐるかも知れんぞ』

『さうか』

と武智は答へたまゝ、その上の事は問はないで博士の後に從つた

馬車の中

林の中には午後の日光が斜に射し込んで青葉の香がそこはかとなく立迷ふてゐる、三人はその間を無言のまゝ足早に通つて往く

林を出ると、其處に和田博士の馬車が待つてゐた、博士は先づ身を躍らせてひらりと之に乘ると、武智も加藤もつゞいて之に乘り込

んだ和田は早速手綱をとつて馬に一鞭を加へながら、武智を顧みて又語り出した

『先日も君に話した通り、僕等は群馬村で會はふといふ約束をしたのさ、これは滿璃子の計畫なんだ、勿論僕はその申出を拒絶する事は出來なかつたよ、それに……』といつて一寸言葉を切つたが

『僕等は別れた後久しく會はなかつたからね、暫らくぶりで話をするといふのが何となく嬉しい樣な氣がしたのさ』

『で、滿璃子の手紙にはどんな事が書いてあつたね』と武智は言葉を挾れた

『それには斯ういふ意味の事があつた、我々は何處に行くか、我々の目的は何であるかといふ事は何人も知らない、私の運轉手と雖も之れを知らないのだ、故に何人と雖も我々の會談を妨げる者はないと書いてあつた、併し不幸にも滿璃子は此數十文字が、僕の妻の疑を招くといふ事を知らなかつたのだ』

武智は怪訝な顏をして

『何だつて、妻君が讀むといふ事を知つてゐたら、手紙を家へ屆けさせる者があるものか、一體君が呑氣過ぎる』

『いや』と和田は武智の言葉を押しとゞめて、そりや僕も知つてゐ

るだから僕への手紙は常に倶樂部へ届けさせる事になつてゐるのだ
處が玆にも妻の間諜がゐるらしい、いや居るに相違ないのだ、で、
どんな手紙でも妻の方が僕より先に讀むらしい、その證據には僕の
所へくる手紙はいつも遲いものね、消印を見ると早くなけりやなら
ん筈なのが、キットおくれて僕の手に入る、甚だ可笑しいわけさ、
併し誰が間諜になつてゐるか、そりや到底判らない、現に最後の滿
璃子の手紙なども、昨日の晝間受取らんくつちやならぬ筈なのに、
夜になつてしかもおそく受取つた樣な始末だ、どうも不思議だか
ら怪しい者を調べて見やうと思つたが、何しろ時間が切迫してゐる

ので、その暇もなく今朝早く馬車に乘つて出かけて來たのさ、而し
て僕は群馬村で晝過まで待つた』
『處が滿璃子は來なかつたんだらう』
と武智は博士の顏を見た
『然うだ』と和田は顏を顰めて、『指定の時間も過ぎ、更にそれから
又一時間も經つたが、滿璃子の姿は見えない、そこで僕は途中まで
迎に出たさ、道は此通りの一本道だから、滿璃子に行き逢はん筈は
ない、僕はどん〳〵林間の道を進んで行つたが、人つ子一人に出會は
ないといふ始末だ、僕は何だか心細さと不安とに襲はれつゝ、尙先

に進んで行つたが、とう〳〵滿璃子に逢はない、その代りに……」

といひかけたが、急に聲をあげて

『あゝ來た來た、もうその場所まで來た』

といひながら馬を留めた

車上の武智と加藤は驚いて顏をあげて見ると、直ぐ眼の前に、かねて見馴れた滿璃子の鼠色に塗つた自働車が無殘に横はつてゐる

枝梢の白片

洪水の退いた後の河原にも儲へやうか、否それよりも、今三人の

前に開けた光景は荒寥たるものである、美人は去つて影をとゞめず僅か數時間前までその妖艶花の如き姿を載せた自働車は、空しく其處に横はつてゐる、風は此悲しき日を弔ふが如く微かに私語き、雲は低く垂れて陰深たる森を愁へしめる

馬車の留まると共に、先づ鼠色の自働車を見た武智等は、更に次の瞬間に於て、その傍に横はれる生死不明の人間を見た、驚きつゝ更に眼を睜れば、そのあたりには斑々たる血痕がある、草は蹂み躙られ、樹の枝は折れ、上衣は落ち散り、靴は飛び、見るからに、數時間前の慘憺たる活劇を想はせる、運轉手得能の姿はその邊に見えな

いのだ

和田博士は再び聲を震はせつゝ、

『此處だ、先刻僕が來た時も、矢張自働車は空だつのだ、それから運轉手は側にゐた、然も血に塗れてゐるぢやないか、僕は喫驚したいや餘り喫驚したので何をする事も出來なかつた、併しそのまゝにもして置けないので、先づ運轉手を馬車に乘せて次の村迄連れて行き、其處で醫者に賴んで置いて來た、それから警察へと思つたが、その村には無いので、已むなく裁判官にまで報告して來た、裁判官といふのは大分年を老つてゐたが、早速急使を馳せて町に警官を呼

び、自分だけ茲へ來て檢死をやつてくれた、尤も警官が來るまで此ゝにして置けといつて去つた』

と博士はぼつ〳〵語つて來たが、急に顏を擧げて

『やア誰か來るやうだな、あの中には多分警官もゐるだらう』

『警官？』と武智はいつたが、急に叫ぶ樣な聲で、『警官なんか來たつて何の役にも立たん、それよりも運轉手が居なくては駄目だ、得能さへゐれば何でもすぐわかる、此事件を詳しく知つてるのは彼だけだからね』

『そりや然うだ、然し運轉手には隣村まで行かなきや會へない』

と和田は遺憾さうにいふ

『然うだ、僕等は當面の方法を講じなきやならん』

といふかと思ふと、武智はひらりと馬車から飛び降りて、注意深く爭鬪の行はれた四邊を見廻した

先づ第一に彼の眼を惹いたものは、稍々高き樹の枝に懸つてゐる白絹の一片である、之を見るや武智は一人點頭いて、誰にともなく呟いた

『此絹片は高價なものだ、貴婦人でもなければ用ゐるものではないして見ると令孃は此道を行つたに相違ない、然しこんな高い處に絹

片の懸つてる處を見ると、是は多分誰かに抱へられて行つたんだな』

といふかと思ふと、近づき來る警官や百姓などには見向きもせず、そのまゝ草を分けて林の中へ入つて行つた

五里霧中

『貴方ですか、此事件の最初の發見者といふのは？』

と、警官はつか〳〵と寄つて來て訊いた

『然うです』

と博士は簡單に答へた

『失禮ですが、今一度その時の樣子を話して下さいませんか』

と警官の言葉は叮嚀である

『承知しました』

和田博士は今一度繰返して偶然にも、此道にかゝり、かゝる非常なる事件に遭遇したといふ事を語つた、勿論面倒を避けて、自分と滿璃子とが群馬村にて會ふ約束があつたことは語らなかつた

和田博士がかゝる說明をしてゐる間に、武智は尙も奧深く進んで、宛然猛獸の跡を見つけた獵犬の樣に、只管叢の中を走つた

『どうも莫迦に左右の樹の枝が折れてゐる、こりや無茶苦茶に奴等

が走つたのだな、もう滿璃子孃が攻擊に會つたのは明かだ、然し此事件に和田の妻君の關係ありといふ事は……どうも僕には信ぜられん、いや信じたくないな』

と獨語ちながら、尙も奧深く進んで行つた、やがて武智は樹の少ない廣場へ出たが、其處には多くの道が諸方へ走つてゐるのである

『こりや不可』と武智は當惑した『何方へ行つたか知らん、待てよ

こりや和田と加藤の力を借りるより外に仕方がないぞ』

といひながら、早速元來た道へとつて返した、そして二人に應援を賴んで、三人各自の道を進んだ、一人は右に、一人は左に、武智は

中の道をとつて進んだ、暫くすると、突然和田は高聲に叫んだ

『おい〳〵、こつちへ來い、玆に血が落ちてるぞ、それから布も落ちてゐる』

武智は早速博士の方へ馳つて行つた、成程地上には生々しい數滴の血痕があるのみならず、又も一片の布が落ちてゐる

『はゝあ』と忽ち武智は考へた、之より先はもう令孃を抱へて行かなかつたな、その證據には小さな靴跡も見える——や、何だ何だ、これは！』

といふに、一同も驚ろいて見ると、草の中に何物か輝く物が落ちて

ゐる、武智はそれを取上て見ると、七寶で美くしく象嵌したメタルの一種であつた、多分婦人の襟か胸かに用ふる裝飾品の一つであらう、武智はそれを衣嚢に收め、そのまゝ面眞目な顏をして前へ進んだ、和田も加藤も默々としてその後に從つた

やがて武智は二人を振返つていつた

『どうも滿璃子孃は一人の……いやもつと多いかも知れないが、兎に角惡漢共と激鬪したらしいね、あの氣性ではさうもあらうが、見給へこゝに帶も落ちてゐる、どうなつたらうな……おい和田君、事によると、もう手おくれになつたかも知れんぞ！』

博士はそれには答へなかつた、が、顔色はひどく蒼褪めて、疑と其處に落ちてゐる婦人帶を眺めてゐる、武智は元よりその心を讀んだ、よしそれが縁もゆかりもない者にしろ、若い婦人が斯ういふ目にあつたとすれば、何人も雖も戰慄して之に同情せざるを得ない、まして和田には天にも地にも只一人の戀人である、譬へ二人の意志は通ぜず、二人の手は握るよすがが無かつたにしろ、身も世もあらずと愛した女の事である、その愛する滿璃子が今は殺されたのかも知れない、若し本當に殺されたものとすれば、自分は額にピストルを當てゝ彼女の後を追はふんとも考へたらう、その決心の程を早く

も武智は見てとつたのだ

併し武智はさりげなく微笑んで、一寸足を留めるや、輕く博士の肩を叩き

『おい君、僕は今非常に悲觀してゐたよ、もう滿璃子は到底援ける餘裕がないかと思つてね、しかしすつかり忘れてゐた事が一つある滿璃子孃は西班牙人の血をひいてゐるのだね、從つて毒のある指環を年中離さないのだ、僕はそれをすつかり忘れてゐた』

『え、毒のある指環？』と博士は喫驚して、『僕は一向知らんがね、一體それは何だ？』

荒廢せる建物

雄々しい性質を備へてゐるとはいへ、滿璃子は花の如き美人である平生馬に乘り、自轉車に乘り、自由に公園などに駈け出すので、一見お轉婆の樣には見えるけれ共、矢張世の波風はまだ知らない筈である譬へて見れば御苑の花の樣なものである、鮮かな天日のもとに、悠揚と紅紫を競ふて居るけれども、まだ路傍の花の樣に砂塵を浴びた事は無い、然るに武智の言葉によれば、その花の樣な滿璃子が恐ろしい毒の指環を持つてゐるといふではないか、博士和田義太

郎が驚いたのも無理はないのだ

併し武智は微笑みながら博士を見て

『君は知らなかつたのか、僕は前からちやんと知つてゐたが、滿璃子嬢は左の手に大きな指環を嵌めてゐた、その指環の紋を拗ると、中が器械仕掛になつてゐて、孔の中から劇しい毒が吹出してくるやうになつてゐる、此毒を嘗めれば立處に死ぬといふ劇藥だ』

博士は心許なげにそれを聽いてゐたが

『さうか、然しそりやあ君が僕を慰める爲にいふ言葉だらう』といつたが、益々顏色を蒼くして『殊に毒藥を持つてるからにや、惡漢

共の慘酷な目に逢ふよりはと、今頃はもうそれで自殺してゐるかも知れない』

『莫迦いつちや不可』と武智は笑つて

『滿璃子孃の樣な悧巧な女が、さう忽ち自殺してたまるものか、その毒藥で敵を殺すのだ、身に何等防禦の武器か無くなつて了つてつら、指環の毒で敵を殺したといふ例はいくらも外國にある』

と二人が話してる時、加藤は何を見つけたのか、犬の樣に狹き橫道に走つて行つた

『おい加藤、何處へ行くのか』

と武智は大聲を上げて呼んだが、加藤はそれを耳にもかけず、忽ち彼方の樹立の中へ隱れて了つた

『何か見つけたのだな』と思つたので、つゞいて武智もその後を追つた

やがて二人は、半ば荒廢した古き建物の前に出た、加藤は息をつきながら

『先生、私は之を見つけたから遣つて來たのです、此中に滿璃子を運んで來たのではありますまいか、併し御覽の通りに壞れて了つて部屋らしい處もない、又穴倉らしい處も無い、して見ると矢張違ひ

ますかな』

といひながら、武智の顔を見てそのいふ處を待つた

武智の顔は急に變つて來た、そして滿足げに微笑みつゝ、默つて地上を指した、加藤も其處を打視ると、果せるかな數滴の血痕がある

『見給へ此血痕を！』と武智は口を開いた、『思ふに滿璃子孃は此場所で自由になつたに相違ない、惡漢共は玆に至つてもう滿璃子を連れて行く事が出來なくなつたのだ』

といひながら、更に又建物の壁ぎはを指さした、其處の壁はひどく崩れて多くの土塊や、基礎になつてゐる石などが脱け落ちてゐる、

武智はそれを見ながらまた口を開いた

『どうだね、君等に分らんかね……、それ一時間ばかり前に大雨があつたらう、恰度あの時惡漢の奴玆へ來て坐つたのだ、見給へ、その男の坐つた處だけこんなに乾いてるぢやないか、それから此血だね、之はその男の傷口から流れきたのに相違ないのだ、惡漢の奴あまり出血が夥しいので、玆まで來てへこたれたに相違ない、滿璃子孃はそれより前に惡漢の手を離れたんだね、さうだ先刻布の落ちてゐた處で自由になつたんだ、どうもこれまでの事を綜合して考へて見ると、確に滿璃子孃は自由の身になつたやうに思はれる』

武智の言葉は嚴然として、寸分の疑を容れさせない樣にきこえる

負傷者の許へ

然し博士は尙も悲し氣な顏をして武智を見た、滿璃子を愛する事が深いだけに、實證を見ない中は安心が出來ない、それに斯ういふ森林の中で、如何に滿璃子が毒藥を持つてゐやうと、又如何に滿璃子が大膽不敵であらうと、要するに女の事であるから、さう容易く惡漢の手を遁るゝ事は出來ない筈である、殊に布の落ちてゐた事といひ、又血の落ちてゐる事といひ、武智のやうに解釋すれば如何に

も好さゝうであるが、それが却て不幸の徵かも知れない、布の落ちてゐたといふ事は、其處で又僂い反抗をしたものともとればとれる血痕のあるといふことは、滿璃子が負傷したものと取れぬ事も無い武智を信ずる事の深い博士も、此場合のみはさう容易く安心も出來ず、あれかこれかと樣々に思ひ亂れた

それを見て武智は慰め顏に

『君然う心配せんでもいゝよ、大丈夫だ、僕が保證する、滿璃子孃は確かに安全だよ』

『然し』と博士は蒼褪めたる顏を上げて

『君のいふ事は餘りに臆測に過ぎると思ふ、これだけの事實を見たのでは、どうも僕には安心する事が出來ない』

といひながら、尙も何か證據は無かとその邊をきよろ〳〵と見廻した

『いや、大丈夫、僕のいふ事は屹度違つて居らん、まあ待ち給へ、いま一二時間の後には我々は令孃に會ふ事が出來るから……』

『え、滿璃子に會ふ事が出來る、戯談いつちやいけない、死生さへもまだ不明ぢやないか！』

と博士は驚いたといふ顔をする

『いや本當だ、まあ落著いて今少し待ち給へ』

と武智は胸に成算でもあるが如くにいひ放つた、此時まで默つてゐた加藤も不意に聲を出して

『いや先生のいふのが確かでせう、それに私も考へましたが、令孃はそのまゝ家へは歸りませんな、どうも惡漢共をころしてやらうとでも考へたらしい』

武智は意味ありげにそれを聽いてゐたが更に附け加へて

『いや令孃は先づ第一に運轉手を探したに相違ない、恐らく僕の眼は誤らないだらうと思ふ』といつたが、後の口の中で

『かういふ危險を犯さして得能を令嬢の處へ送つたのは無益ぢや無かつた、流石のお轉婆娘もあの索引力ある運轉手には惚れたと見えるわい』

やがて三人は元來た方へ引き返した、これは武智の主唱で、こゝまで見ればもうその先は必要がない、之からは得能に會つて樣子を訊く許りである、といふので三人は林を出た、そして待たしてある馬車に打ち乘つて、隣村に傷ける運轉手を訪ねんと鞭を上げた

和田博士夫人

運轉手得能はどうしたらう、幸にその傷は淺かつたらうか、滿璃子はどうしたらう、果して兇漢の手より遁れ得たらうか、今之れを語るに先だつて、更に一つ讀者諸君に知らせねばならぬ事がある、そは何事であるか、いふまでもなく和田博士夫人傳子に就てゞある

先に和田博士が聖都を離れて、八幡の森を彷徨てゐた頃の事である夫人傳子はその居間に於て、既に讀者諸君の熟知せる人物と對座してゐた、夫人は前にも記したやうに美人である、丈は高からず低からず、極めて恰好のよい身體に、金髪はゆるやかに波をうつてゐる、殊に人形の樣なその顏は、見る人として快感を起さぬ者は無い

夫人の前に腰を掛けてゐる者は何人か、これ昔の西班牙に於ける理髪師、今の侯爵伏見義政である

傳子は神經質らしいひきつッた聲で伏見に言つた

『侯爵、貴方は我々夫婦の間に武智の入つてゐる事を知つてますか』

『知つてますとも、武智は御良人の親友ですからな、昨日滿璃子から和田さんへの手紙を先取するに、隨分苦心したもんです、第一倶樂部のボーイを買收するにも、武智のおかげではねえ、それから金と……

傳子は急に不快な顔をして

『あアもう金といふ言葉はよして頂きませう、侯爵、貴方は數箇月間どうして生活して被居いましたか、お忘れなすつては困りますよ』

『勿論、それは貴方の金を頂戴して居つた、然し目的遂行の後にはどつさり利息をつけて返しますせ』

『貴方の目的といふのは到底不可能で御座いますよ、貴方は滿滿子と結婚が出來ると思つてゐますか、彼女にはちやんと妻のある男がついてますよ』

『それは貴方の想像に過ぎません』と伏見はにや〳〵笑つてゐる

『ヤヽえ、少くも私は貴方よりは好く知つてゐます』と傳子は口惜

しさうに足をばた〳〵させながら『どんな女でも私の良人を見ると氣が狂ひます、かういふ事は今迄に幾らもありました、現に私も狂つた一人ぢやありませんか、ま、話は止めませう……、それよりも何か貴方は重大な要事について旅行するから、金が要ると仰有つたぢやありませんか、本當ですか』

『然うです、此旅行に就てはいろ〳〵混雜した事があるのです』と伏見はいつたが、急に其の陰險な眼をあげて、何處となしに輕蔑の色を漂はせ『武智の馬鹿がね私を瞞着し得たと信じてゐるのです、ハヽヽヽ、これには種々の面白い話もあるが、兎に角彼奴め、私

を餘程の馬鹿と思つてゐるから可笑しい、馬鹿と馬鹿との瞞し比べだ、はヽヽヽ』

傅子は靜かに小聲で

『いゝえ、侯爵、さう思つて被居ると間違ひですよ』

『なアに御心配は無用です』と伏見は尙も傲慢な顏をして『まあお聽きなさい、武智が斯ういふのです、前田侯爵夫人が私に惚れてね留田へ行つて私を待つてゐるといふのです……』

『留田？侯爵夫人の出發したのは事實だが留田ぢやありませんよ』

『そりや私も知つてゐる』と伏見もしたり顏をして『勿論留田ぢや

ない、夫人の行つた處はもつと北の自分の領地で、其麼事はちやんと私も探つて知つてゐるのだ、處が武智の馬鹿奴、私がのこ〳〵留田まで女を追つて行くものと思つてゐる、だから思つたよりは彼奴も馬鹿だといふのです』

密談數刻

伏見の放言をよくは耳にも留めないで傳子は事の眞相を訊かんと欲した

『どういふ理由で武智は又貴方を瞞さうとしたのです？』

『多分滿璃子から私を遠ざけやうと思つたのでせうが、まあそれはそれとして一つ手つ取り早く私達の話をつけやうぢやありませんか貴女は何ですね、私が數日の中に滿璃子を殺すか、または妻にすれば、貴女の財産を半分出すといひましたね』

傳子は急に顏色を變へて

『靜かに！　靜かに！』と制しながら立上つて四邊を見廻した

伏見も氣がついた樣に聲をひそめて

『私は滿璃子が大嫌だ、どうせ愛を受けない樣な女と結婚しても仕方がない、しかし金持の女と結婚して、古い家門といふ金箔をつけ

るのは必要です、だから滿璃子と駄目なれば侯爵夫人と結婚しなければならない、侯爵夫人と結婚するからには、滿璃子を此まゝにして置く事は出來ない』と沈痛な聲でいふ

傳子も聲をひそめて

『滿璃子を殺す事に決心なさいましたか、それをきいて私も肩が輕くなつたやうな氣がします』とその美くしい頰に凄艶な笑をたゞよはした

『いや、もう今頃は死んでるかも知れない』と伏見は凄い眼を光らせて『實はそれで相談に參つたのですが、つまりその罪跡が上らぬ

中に私は高飛をしやうと思ふのぢやが、貴女の處へその費用を貰ひに參つたのです』

傳子は不審相な顏をして

『何故遁げるのです、誰かその計畫を知つてるものがあるのですか』

『いゝや、そりや誰も知らん、私の計畫に就ては何時も假面を被つてゐますからな』と伏見は自信ある聲でいひ放つたが

『然しながら疑がかゝつてゐないとも限らない、今迄にも私の計畫を破らうとした奴がある、兎に角私は一時聖都から逃げる必要があるから、先刻お話した金を頂きませう！』

と物凄い聲でいつて、ぢろりと傳子の顔を睨みあげた

傳子は此態度に急に怖氣がついたが、恐怖ながら

『何の位要るのですか』

『然うですなア、三萬圓ばかり頂戴しませう』

と伏見は冷然としていひ放つた

『え、三萬圓？』と傳子は喫驚して『私を甚麽金持と思ふのですか』

『勿論いつもならこんな事はいひませんがな、今日は確かにある、

先刻銀行から三萬圓受取つた事をちやんと知つてゐるのです、はゝ、

ゝゝゝ』と伏見は笑つて

『私の仕事さへ出來れば、三萬圓位少ないものぢやありませんか、

ねえ、それとも約束を取消さうと仰有るのですか』

と恐ろしい顔をしてつめ寄つた

『いゝえ』と傳子は聲を震はして『ま、私を信用して下さいまし』

『信用不信用の問題ぢやない、然し兎に角貴女は私の手中にある』

といひながら椅子を夫人に近寄らせた、その眼は物凄い光を帶びて

如何なる惡事をも仕兼まじき形相である

傳子は一層聲を震はして

『お互に手中にあるのです』

といつて伏見の顏を睨んだ、蒼褪んだ頰には急に血が潮して、美くしい顏もいふばかりなく物凄く見える、恰も恐ろしい敵と敵との會合のやうで、何となく凄愴の氣が部屋の中に充滿した、然し孰れがより强かつたかといふ事は、今更說く必要があるまい

嫉妬の嵐

傳子は眼を閉ぢてつと立上り、殆ど機械の樣に机の方へ歩み寄つた、そして何か非常な力にでも動かされたやうに机の曳出しをあけた、取出したのは今朝銀行から受取つたばかりの三萬圓の紙幣であ

る、その封もまだ切らずに、むざ〳〵と奪ひ去られるかと思ふと、流石の傳子もいい氣持はしなかつた、然し脊に腹は變へられぬ場合であるから、傳子は觀念の眼を閉ぢてそれを渡した

『や、有難う』と伏見は一言したばかりで、その金をポケットに入れたが、何となく苦笑して『傳子さん、さう悲しんでは不可ません三萬圓位何でもないぢやありませんか、三萬や五萬は要するに一晩の勝負ですよ、若し運がよかつたらいづれ數日の中にお返濟しませう、然しその前までにきつと敵手の女が死んでゐませう、では左樣なら！』

いふかと思ふと、忽ち伏見は部屋を出て歸つて行つた、傳子は何ともいふべき言葉を知らない、たゞ呆然と伏見の後姿を見送つてゐたがやがて身を飜へして次の室へ行つた、此室は良人の書齋で、書齋から露臺につゞいてゐる、露臺の傍には更に書室がある、傳子は堪へ得ぬ怒をおさへて、ふら〳〵と此室まで行つた、見ると其處には書きかけの畫がある、すらりとした理想的の美人像で、顏はヴェールで被はれてゐる、花に水でもやつてゐるやうな姿で、未成品なから、如何にも力のこもつた立派な作である、傳子は憤怒に堪へぬ眼でそれを見てゐたが、つかつかと進み寄つてそのヴェールを取つ

た、嫉妬の眼で見るからばかりではあるまい、それは滿璃子の顏にそつくりである

『厭な奴！』と傳子は唾棄するやうな調子で獨語を初めた『あゝ早く思ひ知らしてやりたい、でなきや私は氣狂になる、他人の良人に手を出すなんて、餘まり憎らしい事をするぢやないか、まアいゝ、何も彼も秘密にして置かうよ、成程良人は私を愛さないかも知れぬしかし兎に角良人は私のものだ、どこまでも私のものだ、呪咀つても之を誓ふ』

かういふ顏は凄い程蒼褪めて、眼はきよろ〳〵と不穩の色を呈し

てゐる、嫉妬の焔は炎々と胸を焦して、今は殆ど常識を失つてゐるのだ、そして少し高い處にある樫の木の箱を取下ろした、その中には大切な古い繪や、未成品などが入れてある、その箱は博士が常に自分で鍵をかけて置く秘密ものである

『何も彼も私は知つてゐる、かまはない明けて見やう』

といひながら、強い好奇心と嫉妬にかられて、傳子は兼てひそかに作つて置いた他の鍵でその蓋を明けた

箱の中には大きな金縁の繪があつた、繪は滿璃子に似てゐた

『おや！』

と傳子は思はず叫んだ、そして更に第二の箱を取出し、第三の箱を取おろし、悉くその蓋を明けて見た、今や殆どヒステリーになつた傳子には、いづれも皆滿璃子に見えないものは無い

『畜生』

と凄い聲で叫ぶかと思ふと、突然其處にあつたナイフを執つて、第一のカンバスにさつくと突き立てた、その顏を二つに切られた畫面の美くしい滿璃子は吹き入る風にヒラ〳〵と飜つた

『態を見ろ！』

と傳子は恐ろしい笑をもらして、更に第二のカンバスに切つけた、

第三のカンバスに切付けた、かくして其處にある程の繪を切りつくした時、ほつと一息吐いて

『ほゝゝゝ』

と心地好さ相に笑つた、殆ど凡ての感覺を失つて狂人の如くに見えた

然し切りつくして了ふと漸く自分に返つた、そして汗をふきながらソファに寄りかゝた、餘りに亢奮したので、何となく疲勞を覺えたのである、が、忽ちまたむら〳〵として、自分の部屋に入り、帽子と外套を持つて出かけやうとした

傳子は今や外へ出やうとした處で、ぱつたり一人の婦人に出逢つたまだ見た事のない女であるが、恐ろしく蒼白い顔をしてゐるので直に此嫉妬深い和田夫人の注意を惹いた、然し女は靜かに傳子の方へ歩みよつて

『和田博士のお宅はこちらで御座いますか』と訊ねた

『然うです、何か博士に御用ですか』

『は、一寸博士に直接にお話し申したい事が御座いまして』

傳子は急に體裁を作つて、つとめておとなしやかに見せやうとした

『こりや良人の新情婦であらう、一つ良人の秘密を聞出してやらう』と思つたからである、で急に笑顔を見せて

『今不在で御座いますがね、ま、上つてお待ち下さいまし』

此女は前にいつた波麻子である、伏見の前の妻であるが、今は探偵武智の重要なる使命を帶びて來たのである、そこで波麻子は故意とお傳なるを知らぬ風に裝ひ

『博士の奥様には内密にして下さいまし、實は滿璃子さんの處から來たので御座います』

お傳もまけずに自分がお傳ならぬ風を裝つて

『あ、さうですか』と點頭きながら、『ま此方へお入りなさいまし』と波麻子を自分の部屋へ導いた、部屋は少し暗いが、よく整頓した綺麗な部屋である

『さ、此處へお掛け下さい、決して誰も來ませんから御心配なく——で、滿璃子さんに何か起つたんで御座いますか』

波麻子は急には口を開かなかつた、なるべくお傳に附いてゐろといふ使命を帶びて、滿璃子の小間使を裝つて來たのである、然し夫人の問に輕蔑らしい口調で

『滿璃子さん？　私はあの人に二度と會ひたくありません、あの人

の爲には度々難儀しました、外へ行つても面白くないから仕方なしに彼處に居るのです』

『貴女は滿璃子さんを惡い人といふのですか』と傳子は喜ばし相な顏をして『そして傳言とは何です、滿璃子さんから直接にお賴みなすつたのですか』

『左樣で御座います、今朝出かけに會ひました、夕飯後にくればお仕事をといふ……』

『え、滿璃子さんはお歸りになりましか』

波麻子はそれには答へないで、夫人の耳に口を寄せて何か私語い

た、忽ち傳子は憤然として床を蹴つて立つた、そして震ひ聲で

『まあ怎うしたらいゝでせう、怎うしたらいゝでせう』

といつたが、やがてまたぐつたりと椅子に倒れた、そして氣拔けしたやうにウロウロと四周を見廻したが、急に立ち上り

『此處ぢや不可ない、さあ、彼方へ行つて話しませう』

と先に立つて波麻子を導いた、それは寢室であつた

滿璃子の脫走

活劇の舞臺は益々廣くなつて來た、武智は和田博士と共に馬車を

馳つて、負傷せる得能を訪はんとし、伏見は和田夫人傳子を脅迫して金三萬圓を捲上げ、伏見の妻波麻子は武智の内意を受けて、今や和田夫人と共にその別室に何事をか語らんとしてゐる、此暇にあたつて、佳人滿璃子の身の上に立返り、少しくその動靜を語つておかう

話はずつと前の林中の慘劇に立返る、滿璃子は自働車にて馳せ歸り昏倒せる運轉手を援け起さんとせる時、不意に酒くさき息を吹いた一巨漢は、滿璃子に風呂敷をかけて林中に奪ひ去つた、此幕はこゝより開かれるのである

幾立か危難を去つて、更に運命の數奇に弄ばるゝ滿璃子は、風呂敷をかけらるゝに及んで益々焦つた、どうかして遁れたい、どうかして惡漢の手を離れたい、と出來るだけ手をふり足を振つて身をもがいたけれども焦れば焦るほど、風呂敷は咽喉を緊てくる、それに惡漢の力は非常なもので、しつかりと滿璃子の身體を抱きすくめて少しも動かさない樣にする、滿璃子がもがけばもがく程、惡漢は憎々しげにせゝら笑つた

『やいお孃さん、ジタバタするない、おッとッとッ……』

と雙腕に力をこめて、どん〳〵林の中を走りながら

『駄目でえ！　やい、騒いだつて駄目でえ！　騒ぎやしまるんだ、おとなしく觀念しろい、お嬢さん、はゝゝゝ、俺のいふ通りにおとなしくしてるもんだ』

滿璃子は觀念の齒を切ひしばつて、一言も答へない、折があらば隙があらばその手をのがれやうと、じつと嚢の中から窺つてゐる、それとも知らずに惡漢はやにやにや笑つて

『だがな、俺は幸福者だ！』と獨語を初めた『こんな美人はありやしねえ、全く今まで見たうちぢやア、お前に及ぶもなア有りやしねえ、なあおい、眼の醒めるやうだたアお前のこつた……あッ……』

といつて不意に言葉を已めた、それは滿璃子の爲に、拳でしたゝか顏を撲たれたからである

『こん畜生！　この……この……阿魔奴……助けちや置けねえぞ』

といつたが、顏の痛みに堪へ得ないで、そのまゝ滿璃子を下におろした、鼻を撲たれたと見えて、血がどん〳〵流れ出した、此處が即ち探偵加藤の血を發見した場所である

それは扨置き、惡漢は痛みをこらへて、先づ滿璃子を捕へやうとした時、さつと又顏にかゝつたものがある

滿璃子は下に置かれるや否や、早速の早業に風呂敷をかなぐり捨

て同時に一握みの砂を握んで、さつと惡漢を眼がけて投げつけた、これは子供の頃いたづらごッこをした時、敵を負かす最良の方法だつたので、滿璃子はそれを思ひ出したのだ、處が此砂つぶては、見事に功を奏して惡漢の眼に一ぱい砂が入つた

『こん畜生！　女郎奴思ひ知れ！』

と羅刹のやうな顔をして荒れ狂つたけれども、砂の爲に眼が痛んで思ふやうに見開く事が出來ない、その隙を見て、滿璃子はどん〳〵逃げ出した

亂れごゝろ

滿璃子はたゞ夢中で遁げた、盲目滅法界の方向も定めず遁げた、心の中では運轉手のゐる方へと願つたが、どつちでも好い、兎に角誰か來さへすれば好いがと思つて遁げた、心臟は早鐘のやうに動悸を打つ、呼吸はとまるかと思はれるまでに急速になる、とう〳〵林を拔けて往來に出た、其處で初めてほつと息を吐いた

『あゝ神樣、私はどうしたらいゝんでせう！』

と滿璃子は思はず胸を抱いて祈つた、日はもうだん〳〵傾いてくる

名も無い鳥は折々林から林へ鳴き連れて通るが、人らしい姿は何處にも見えない

滿璃子は前後を見廻して、そして靜に立上り、何處をあてといふ事もなく、足の向いた方へ歩き出した、もう惡漢の追つてくる風もない、

心がだん〳〵靜まるに連れて、いろ〳〵な事が胸に浮んでくる、殊に先刻の活劇はあり〳〵と眼に見えて、何となく肌に粟の生ずる樣な氣がする、異樣なる口笛、惡漢の突擊、發砲、逸走、血、負傷數へ來れば戰慄の種ならぬはない

『得能はどうしたらう？』

ふと此事に考へ及ぶと、滿璃子は名狀すべからざる感想の胸中に横溢するのを覺えた、それは單に負傷を氣遣ふ心持ばかりではない、一種のいひ得ない、胸をそゝられる樣な、此場合、何となく背中の方から寒さを覺えるやうな、譬へる事の出來ない感じであつた

『私は彼に戀したんぢやないか知らん』

と考へ出した、するとそれに近い感想が潮のやうに起つてくる

『一生に一度のこれが本當の戀か知らん……、莫迦らしい、あんなつまらない男に惚れたのか知ら、僕になんか……』